

大和都市計画事業大和小泉駅土地区画整理事業に伴う

高月遺跡発掘調査報告書

1991. 3

大和郡山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、大和郡山市小泉町、小林町で実施した「高月遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業を契機として実施した。
3. 調査次数は3次に分けて行われた。各々の調査期間は下記の通りである。

(第1次調査)

平成2年1月12日～同年3月15日

(第2次調査)

平成2年4月16日～同年6月16日

(第3次調査)

平成2年12月1日～平成3年3月31日

4. 調査は、第1次～第3次を通じ、下記の組織で実施した。

(1) 現地調査

〔調査員〕

山川均、濱口芳郎

〔補助員〕

下大迫幹洋（奈良大学）、本村充保（同）、宮崎秀俊（関西大学）、武田浩子

〔作業員〕

岸田勝信、堀川正治、米田利男、杉山典三、谷沢喜一、尾崎明、大槻一夫、嘉瀬嘉弘、崎山庄勝、中川憲、喜多美寿子、城タマエ

(2) 事務一般

大和小泉駅前地区整理工事事務所

5. 本報告は、下記の分担で作成した。

〔製図・トレース〕

竹内直子（京都女子大学）、下大迫、武田、山川、濱口

〔写真〕

（遺構）山川、濱口

（遺物）山川

〔執筆、編集〕

山川、濱口

6. 調査に際しては、山中敏史氏（奈良国立文化財研究所）より有益な御教示をいただきました。また、地元小林町、小泉町の方々にも多くの御援助をいただきました。記して感謝いたします。

本文目次

I.	調査の契機および経過.....	1
II.	調査地の位置および環境	
1.	地理的環境.....	2
2.	歴史的環境.....	3
III.	調査の概要	
1.	調査方法.....	6
2.	層序.....	7
3.	遺構.....	8
4.	遺物.....	32
IV.	まとめ.....	38

図表目次

図1	大和郡山市の位置	
図2	大和郡山市地形分類図.....	2
図3	周辺の遺跡.....	4
図4	トレンチ配置図 (S : 1 / 2,500)	折り込み
図5	基本土層柱状図 (S : 1 / 20)	7
図6	高月遺跡平面図 (第1、2、3次) (S : 1 / 200)	折り込み
図7	SB-01平面図 (S : 1 / 40)	9
図8	SB-01柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	10
図9	SB-02平面図 (S : 1 / 40)	11
図10	SB-02柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	12
図11	SB-03平面図 (S : 1 / 40)	13
図12	SB-03柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	14
図13	SB-04平面図 (S : 1 / 40)	15
図14	SB-04柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	16
図15	SB-05平面図 (S : 1 / 40)	17
図16	SB-05柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	18
図17	SB-06平面図 (S : 1 / 40)	19

図18 SB-06柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	20
図19 SB-07平面図 (S : 1 / 40)	21
図20 SB-07柱列土層断面図 (S : 1 / 40)	22
図21 SB-08平面図 (S : 1 / 40)	23
図22 SB-09・10平面図 (S : 1 / 40)	24
図23 SK-01平面図および上層断面図 (S : 1 / 40)	25
図24 SX-01平面図および土層断面図 (S : 1 / 40)	26
図25 SX-02平面図および土層断面図 (S : 1 / 40)	28
図26 SD-01、柱列-01・02平面図および SD-01土層断面図 (S : 1 / 40)	折り込み
図27 柱列01・02土層断面図 (S : 1 / 40)	29
図28 SD-03土層断面図 (S : 1 / 20)	30
図29 出土遺物実測図	32
図30 高月遺跡出土石器実測図	34
図31 調査地周辺の復元条里及び北の横大路推定ライン	折り込み
図31 各建物の主軸方向	35
表1 周辺遺跡一覧表	4
表2 土器観察表	33
表3 石器計測表	34

写 真 目 次

写真1 調査風景1	1
写真2 調査風景2	6
写真3 現地説明会風景	8

図 版 目 次

図版1 1. 遺跡全景 (第1～3次合成写真 上が北)	
図版2 1. 第3次調査 調査区北東端序	

2. 同上 調査区南西層序
- 図版3 1. 第2次調査全景(北東より)
2. 同上(東より)
- 図版4 1. 第2次調査全景(南西より)
2. 同上(北西より)
- 図版5 1. 第2次調査区東半(北より)
2. 同上(南より)
- 図版6 1. SB-01 (北より)
2. SB-02 (北より)
- 図版7 1. SB-03 (南より)
2. SB-04 (北より)
- 図版8 1. SB-04 (北より)
2. 同上 (南より)
- 図版9 1. SB-05 (北より)
2. 同上 (南より)
- 図版10 1. SB-06 (北より)
2. 同上 (南より)
- 図版11 1. SB-07 (南より)
2. SK-01 半掘状況(南より)
- 図版12 1. SB-09、10 (南より)
2. SB-08 (北より)
- 図版13 1. SX-01 遺物出土状況(西より)
2. 同上部分(東より)
- 図版14 1. SX-02 (南より)
2. 同上 (北より)
- 図版15 1. SD-01 (東より)
2. SD-03 (北東より)
- 図版16 遺物(土器)
- 図版17 遺物(石器)

本 文

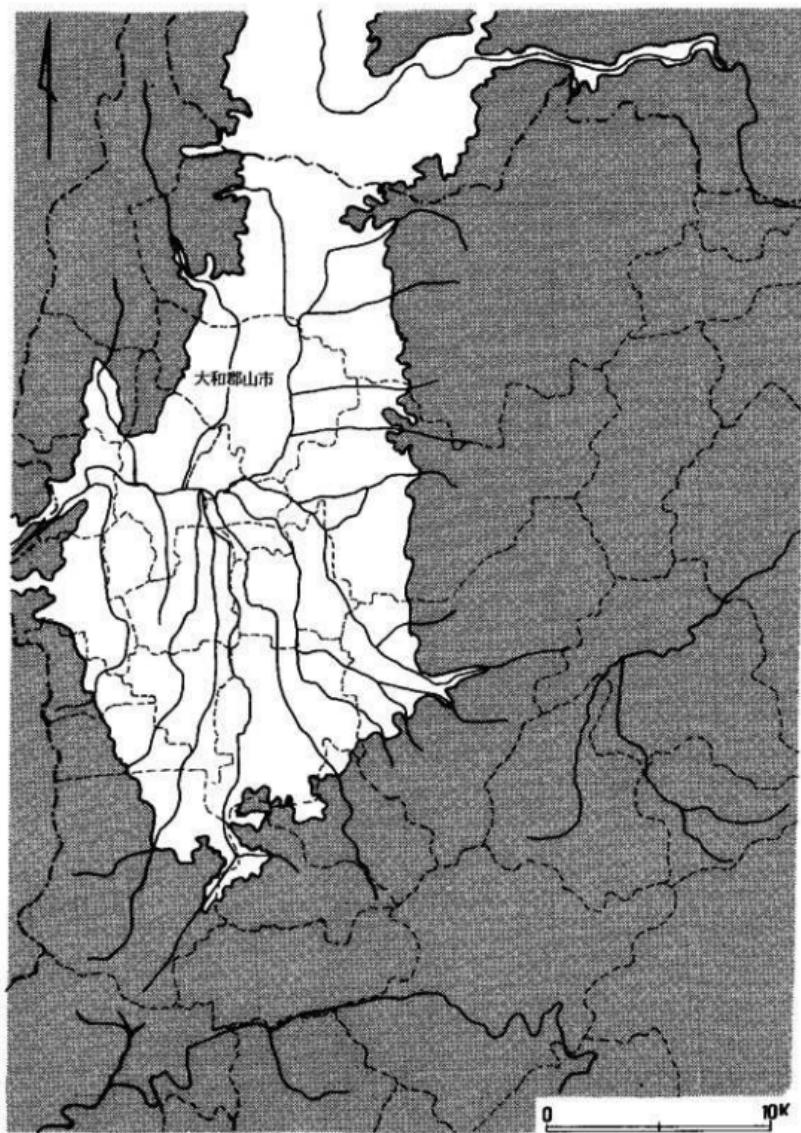


図1 大和郡山市の位置 (S : 1/250,000)

I 調査の契機および経過

今回報告する高月遺跡は、大和郡山市が実施している大和都市計画事業大和小泉駅前地区土地区画整理事業（以下「事業」と略する）を契機として発見・調査された遺跡である。もとより、事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当しないが、事業の対象面積が19.5haと、きわめて広域に及ぶため、事業各年度毎に、事業予定地の公共用地部分（道路、公園等）において、工事に先行して地下構造有無確認のための試掘調査を実施した（各試掘トレンチの位置等は図4の通り）。このうち、トーンで示したトレンチ拡張部分が、今回報告する高月遺跡の範囲である。

事業予定地内における調査は平成3年3月時点で3次に及んでいる。その期間は下に示す通りであるが、1次調査と3次調査では高月遺跡の範囲外での試掘に費した期間も含んでいる。

(1) 第1次調査

平成2年1月12日～同年3月15日

(2) 第2次調査

平成2年4月16日～同年6月16日

(3) 第3次調査

平成2年12月1日～平成3年3月31日

なお、事業対象地内の試掘調査は平成3年度以降も継続して実施する予定である。



写真1 調査風景1（第3次調査）

II 調査地の位置および環境

1. 地理的環境（図2）

大和郡山市は、地形のうえで、市域の中央やや東よりを貫流する佐保川によって、東西におおまかに分けることができる。佐保川の東側は、天理市域の丘陵を開析する諸河川（地蔵院川、菩提仙川、高瀬川等）が形成する緩傾斜の扇状地が広がっており、それが佐保川の氾濫原に接する。対して西側は、かつての富雄川が形成した緩傾斜の扇状地が広がっている。現在の富雄川は南北方向に貫流しているが、それは近世の治水事業に伴う、堤防による川筋固定の結果であり、本来の富雄川は扇状地上を鳥趾上に網流していた。現在の富雄川は扇状地の扇側部を流下し、大和川に合流して¹⁾いるのである。

今回の調査地は、この富雄川緩傾斜扇状地上に立地する。調査対象地（事業予定地内）においても何条かの旧流路が認められるが、それは、試掘によっても確認された（図2）。すなわち、流路の表層は中～粗砂より成り、現在でも地下水位の高い半湿田の状況を呈する。対して遺構を検出した部分は微高地状を呈し、表層はシルト～細砂より成る。これらは畑として蔬菜類が栽培されているケースが多い。むろん高燥であって住居に適しているといえる。

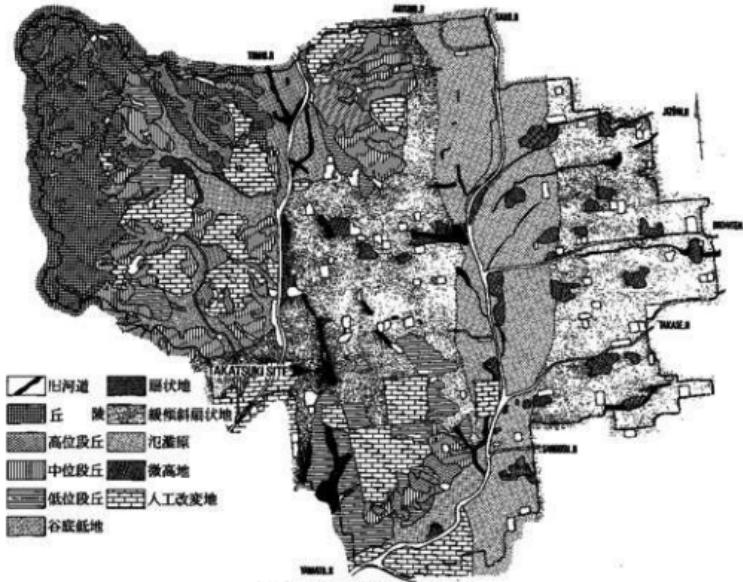


図2 大和郡山市地形分類図

この富雄川緩傾斜扇状地の西側には矢田丘陵より派生した中～低位の段丘群がある。それは、より北側では侵食が進んで平坦面をもたぬ幅の狭い低丘陵群となっている。いずれも大阪層群より成る。

また、調査地の南方には水平な大阪層群より成る、台地性の頂面が平坦な額田部丘陵がある。

2. 歴史的環境（図3）

本項においては、富雄川緩傾斜扇状地内、およびその周辺の丘陵上の遺跡について概観する。
(以下、「本地域」と略する。)

本地域においては、かつて慈光院裏山遺跡(39)よりサヌカイト製の有舌尖頭器が1点出土して²⁾いる。今までのところ本地域では最古の遺物であるが、本例は残念ながら弥生時代の遺構より検出されたものであり、該期における他地域からの搬入、2次的な使用の可能性も仮説できない。ただし、上部洪積層から成るこれらの段丘上に旧石器時代終末期に人類が居住していくても何ら不自然ではない。遺構の発見も含め、今後の調査に期待がもたれる。

さて、確実に本地域においても人類が居住したことを示す遺跡は古屋敷(3)～満願寺遺跡(4)である（両者の境界は判然としない）。この遺跡は縄文時代後期（縁帶文系縄文土器群）から開始³⁾するもので、晩期終末の凸帯文土器も出土している。このあたりになると水稻耕作の雰囲気が漂うが、この遺跡は継続性が強く、古墳時代中期ごろまでは確実に存続する。本地域においては他にこのような遺跡は知られていないので、ここではこれを拠点集落として捉えたい。⁴⁾

つぎに、弥生時代中期に至ると、古屋敷(3)～満願寺遺跡(4)が既述の通り継続するほか、⁵⁾西隣する段丘上において多くの集落が営まれるようになる。西田中遺跡(5)や慈光院裏山遺跡(39)、菩提山遺跡(6)などがその代表である。これらの集落は、段丘上の平坦面を居住域として活用し、段丘を開拓する小さな谷地部分を生産域（水田）として利用したものと思われる。こうした谷部分は崖端湧水による自然灌漑が得られるので、当時の生産技術に適したものであろう。⁸⁾

これら段丘上の集落はその後、弥生時代後期～古墳時代前期まで存続するものが多い。しかし、古墳時代前期後半を境として、これらの集落は廃絶する。おそらく、鉄製農具の普及に基く開発技術の急速な発展が、低地部分における人工灌漑を可能としたため、段丘上の集落に付随する谷水田が生産域としての魅力を失ったことが、そうした廃絶の背景だろう。

そうしたわけで、古屋敷(3)～満願寺遺跡(4)は生産域として、後背湿地などの自然灌漑水田（湿田）から人工灌漑水田（乾田）への転換がなされたので、集落規模自体はより一層拡大する。⁹⁾また、原田遺跡(7)は古墳時代前期より登場する遺跡である。これも、背景には人工灌漑技術の¹⁰⁾急速な普及があるだろう。同様に、本庄・杉町遺跡(8)でも居住がはじまる。この時期には、扇状地内の多くの地点で集落が営まれはじめたものと考えられる。こうした推定を裏付けるように下



図3 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高月遺跡	飛鳥	15	筆尾古墳	" (")	29	遺物散布地	中世
2	慈光院	奈良～	16	舟井城	室町	30	"	奈良
3	古屋敷遺跡	繩文～近世	17	小泉城	中世～近世	31	"	奈良
4	満願寺遺跡	古墳	18	番条城	中世～	32	"	古墳
5	西田中遺跡	弥生(中)	19	新木山古墳	古墳(後)	33	"	奈良～室町
6	菩提山遺跡	弥生～古墳	20	神田瑞藻集落	中世～	34	"	"
7	原田遺跡	古墳(前)	21	稗田・若桜遺跡	弥生～中世	35	西田中瓦窯	奈良
8	本庄・杉町遺跡	奈良～平安	22	下ツ道	飛鳥～平安	36	遺物散布地	古墳～鎌倉
9	下ン田遺跡	古墳	23	北の横大路	"	37	古墳	古墳
10	小泉大塚古墳	" (前)	24	外川遺跡	弥生(後)	38	遺物散布地	古墳
11	六遺山古墳	" (")	25	遺物散布地	奈良	39	慈光院裏山遺跡	弥生
12	小泉狐塚古墳	" (後)	26	"	古墳	40	小泉遺跡 (大塚山遺跡)	弥生(後)
13	小泉東狐塚古墳	" (後)	27	"	奈良			
14	割塚古墳	" (")	28	南鬼塚遺跡	古墳～中世			

表1 周辺遺跡一覧表

¹¹⁾ ン田遺跡（9）では該期の溝（灌溉用と思われる）が検出された。

古墳時代後期については、古屋敷（3）～満願寺遺跡（4）が存続するほかは、今までのところ発掘調査によって確認された遺跡はない。

なお、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて集落が営まれた段丘上では、集落の廃絶後、それと重複するように多くの古墳が築造されるようになる。これは、居住域（生産域）としての魅力を失った、こうした地形区が、低地にある集落の奥津城（墓域）として変貌してゆくさまをよくあらわしているといえよう。それらの古墳のうち、代表的なものには小泉大塚古墳（10）、六道山古墳（11）、¹²⁾ 小泉狐塚古墳（12）、¹³⁾ 小泉東狐塚古墳（13）、¹⁴⁾ 割塚古墳（14）、¹⁵⁾ 笹尾古墳（15）がある。これらは、割塚古墳を除くと、各時期の古墳がほぼ隣接して認められることから、本地域の各時期ごとにおける盟主墓と考えてよいと思われる。この他に、小規模な古墳は慈光院裏山遺跡（39）や菩提山遺跡（6）などで、墳丘を削平された古墳の、周濠のみが検出されている。¹⁶⁾

ところで、続く飛鳥～奈良時代にかけては、本地域においては従前は遺跡の「空白時代」であった。つまり、発掘調査によって遺構が確認されたのは、本庄・杉町遺跡（8）における奈良時代の井戸1例が知られるのみという寂しい情況にあった。しかしながら、本書に報告するように、今回新たに高月遺跡（1）において7世紀代の建物群の存在を確認することができた。なお、高月遺跡の南方には、竜田道に通じる「北の横大路」（23）が存在した、ともいわれている。この「北の横大路」は、西に向かえば竜田道となって河内に至り、東では、現在の佐保川の東側で下ツ道に合流する。この下ツ道を北上すれば御存知の平城京に至り、南へ下れば横大路に合流し、藤原京へと至る。さらに、「北の横大路」を東に延長するならば、それは都祁、山添を経て伊賀に至ったものと思われる。

ところで、この「北の横大路」（23）はその後、中～近世、いや、見方を変えれば現在に至るまで国道25号線として利用されている。このルートは先記したように交通上重要なルートであるが、²⁰⁾ この道に面するように、15世紀中頃には筒井城（16）が築造される。²¹⁾

筒井城は、興福寺大乗院方官符衆徒であった筒井順慶が後に郡山城に移封されるまでの拠城である。筒井城は、すぐ南方に額田部丘陵があり、城郭立地としては、むしろこちらが適する。たとえば、後の郡山城は自然地形（段丘）に大規模な人工改変を加えて築城している。筒井城が、あえて低地を選んだのは、かの「北の横大路」つまり交通の要所としての地を意識したのかもしれない。²²⁾

なお、他の中世城郭としては小泉城（17）がある。こちらのほうは自然地形を巧みに生かした城郭構造をとる。小泉城は、興福寺大乗院方衆徒小泉氏の拠城である。近世には片桐氏1万5千石の拠城として栄えた。

なお、現在みられる村々もまた、中世末～近世初頭にかけて形成されたものが多いと思われるが、これらの村落は旧富雄川が形成した微高地上に営まれている。また、本地域内に点在する溜池は、旧河道を利用している場合が多い。

III 調査の概要

1. 調査方法（図4）

調査は、事業予定地内の公共用地部分（道路、公園等）にトレンチ（幅3～4m）を配して実施した。その結果、遺構の検出された部分（図4中のトーン部分）において、民有地部分（換地部分）までトレンチを拡張して精査を実施した。今回報告する高月遺跡は、この拡張部分の調査にあたる。

事業対象地は、全体として低湿な土壌からなっており、地形的には南側（国道25号線側）に向けてゆるやかに傾斜している。このため対象地南半の水田は半地下水型の状況を呈している。しかしながら高月遺跡の存在する地点は自然堤防状の微高地にあたり、比較的高燥である。

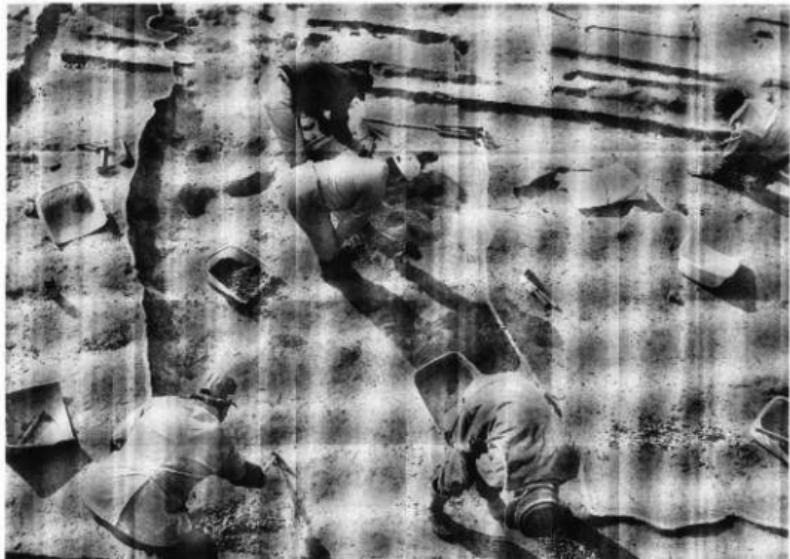


写真2 調査風景2（第3次調査）

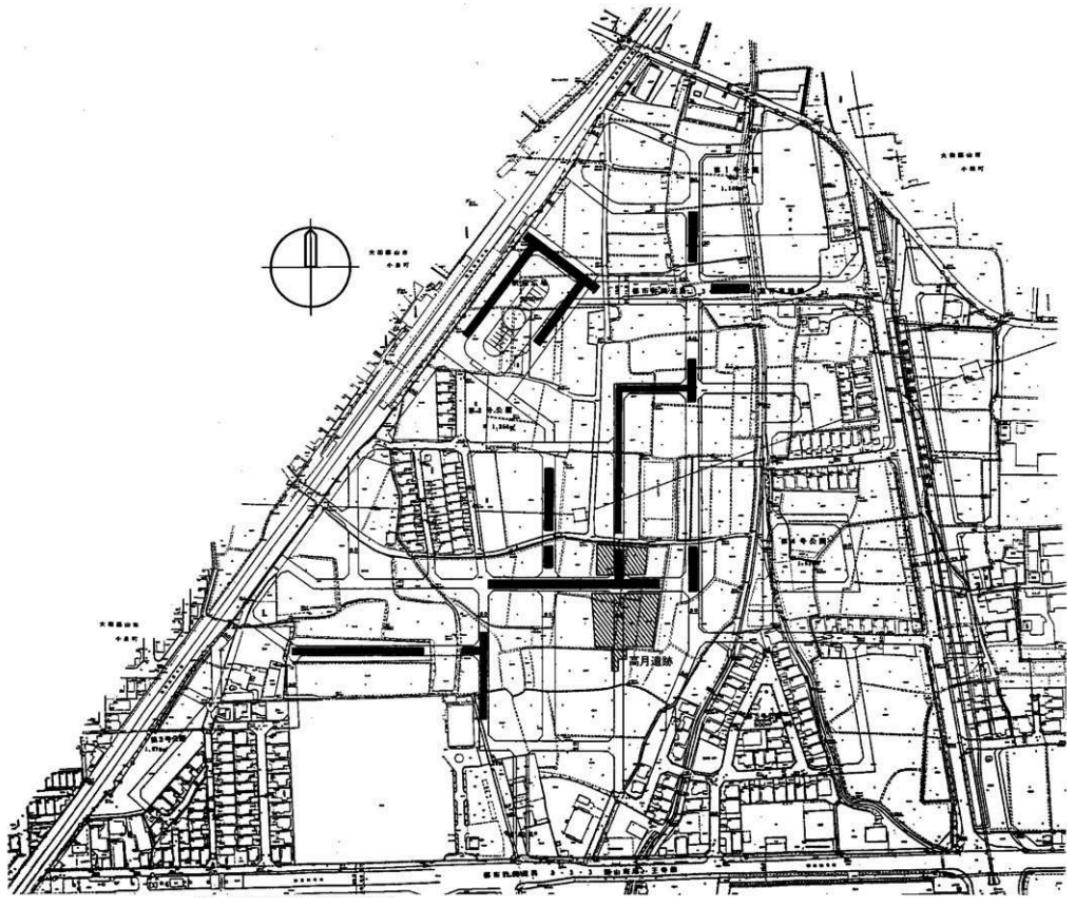


図4 トレンチ配備図 (S : 1 / 2,500)

2. 層序 (図5、図版2)

図5は、第3次調査において作成した基本土層柱状図である。高月遺跡における全体的な土層堆積状況を良好に示している。図中、①層は現在の水田耕作土、②層は近世の耕作土、③～④層は中世の耕作土と思われる層である。これらの各層界には薄い砂の堆積がところどころにおいて認められ、数次にわたる洪水の存在が予想される。

⑦層は暗褐色のシルト質粘土層で、有機物を多く含む層である。この層は、奈良盆地内において広く認められる褐色、あるいは黒色包含層と呼ばれるものにあたる。時期は、今回の調査では確認することができなかった。⑥層はいわゆる“地山”で、今回の遺構検出面である。色調は黄茶色を呈し、シルト～部分的に細砂より成る。

⑨層もまた、今回の遺構検出面であるが、これは人為的な堆積層であり、おそらくは整地土である。下位には⑥層が存在する。このことは、遺跡の經營当初に、ある程度の整地作業が行われたことを示している。

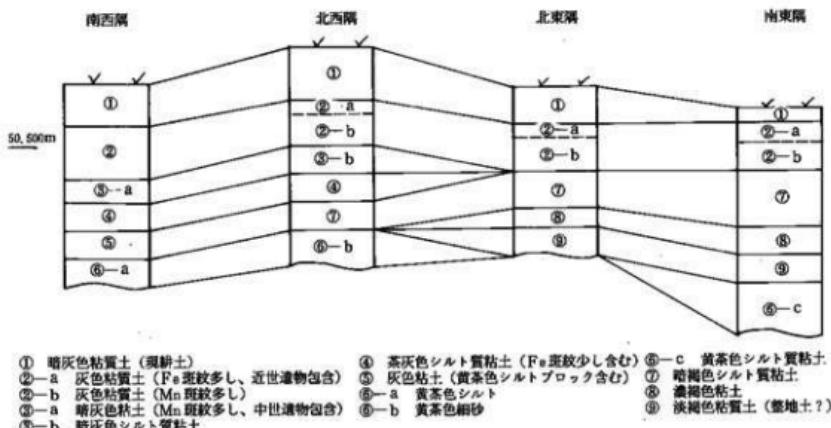


図5 基本土層柱状図 (S : 1/20)

3. 遺構（図6）

今回の調査では、確認されたもので10の掘立柱建物（SB-01～10）、円形土坑1（SK-01）、不定形の落ちこみ2（SX-01、02）、溝1（SD-01）、柱列等（以上はいずれも7世紀に属する遺構）を検出した。そのほか、耕作関係の遺構として溝を数条、検出している。

なお、今回は調査方法上の手落ち、および工事の都合等から各次の調査区間に若干の未調査域を残してしまい、全体像がややわかりにくいものになってしまった。この点については調査担当者として深く反省するとともに、今後、可能な限りこうしたことがないように努力してゆきたいと考えている。

以下に、個々の主要な遺構について報告する。なお、掘立柱建物の平面実測図に示したデーターは、柱間に關しては柱穴の中心（柱穴が遺存しない場合には、掘り方）の中心間の距離を示している。また、柱列の方向については、西側の柱列（SB-08のみは東側柱列）を基準として測定したものである。

なお、各建物の時期については、後章にて総括したい。



写真3 現地説明会風景（第2次調査）

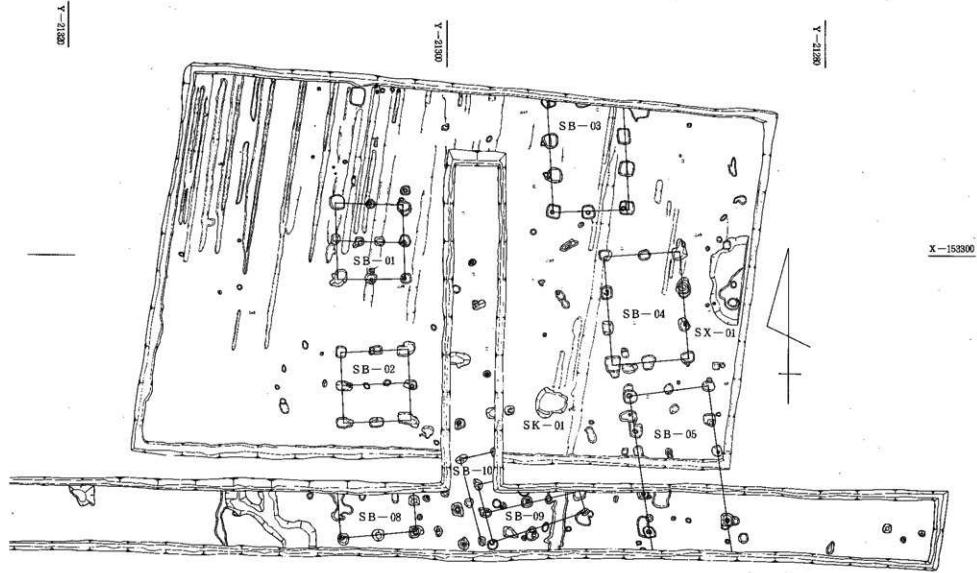


図6 高月遺跡平面図(第1, 2, 3次) (S : 1 / 200)

SB-01(図7、8、図版6-1)

南北約4m、東西約3.5mの2間×2間の純柱建物である。床持ちの柱は2本持つ構造をとっている。南北柱列の各柱間距離は194~207cm、東西柱列に関しては165~181cmを測る。建物の方向はN 1° Wであり、この建物が何らかの基準によって正方位を指向していたことを示しているが、このことは他の掘立柱建物でもほぼ同様である。

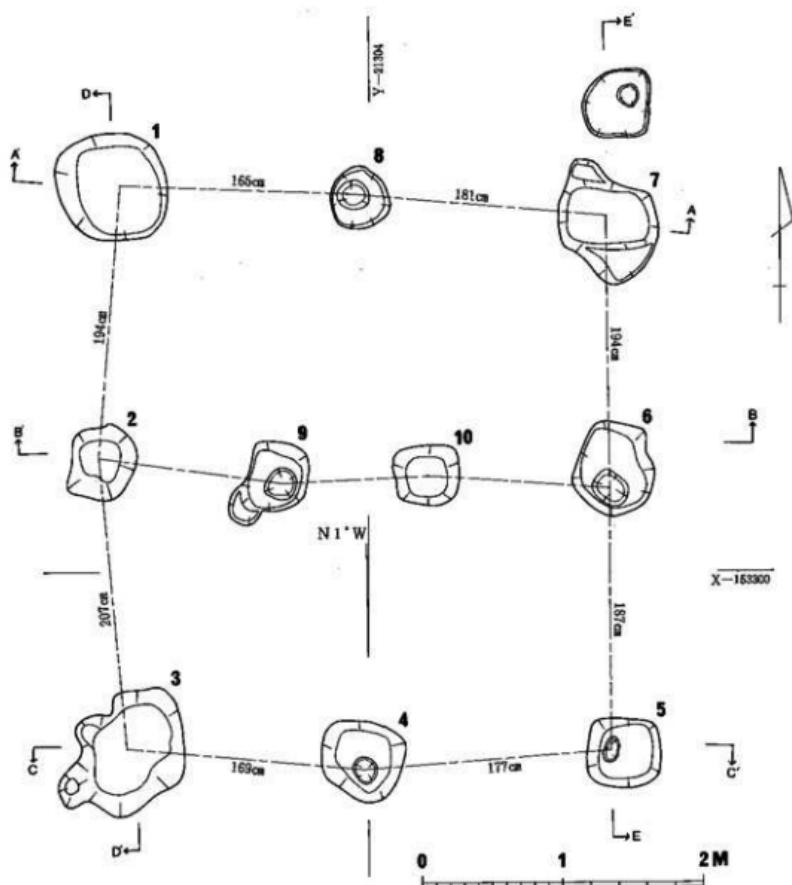


図7 SB-01平面図 (S: 1/40)

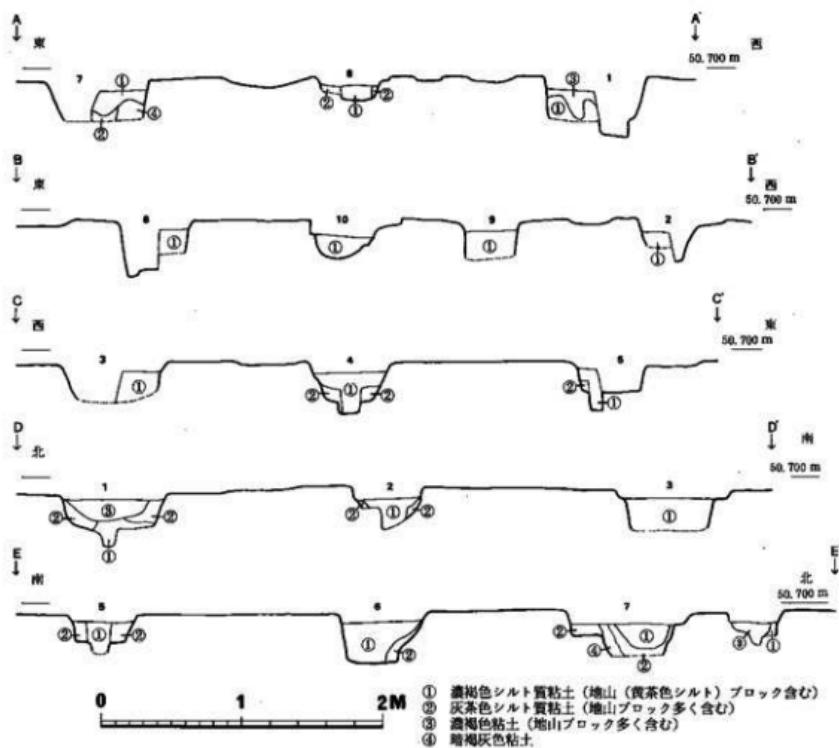


図8 SB-01柱判土層断面図 (S : 1/40)

柱穴の深さは検出面より20cm程度のものが多い。なお、柱は全て抜き取られていた。図8中、①層は柱抜き取り後の埋土、②層は当初の掘り方内埋土と考えられるものである。

SB-02(図9、10. 図版6-2)

南北約3.8m、東西約3.6mの2間×2間の総柱建物である。床持ちの柱はSB-01と同様に2本持つ構造をとる。南北柱列の各柱間距離は180~202cm、東西柱列に関しては164~191cmを測る。建物の方向はN $0^{\circ} 30' W$ であり、ほぼ真北を指向しているといえる。

柱穴の深さは検出面より20~30cm程度のものが多いが、床持ち柱(柱穴9・10)に関しては、5~10cmと、他のものに比してやや浅い。なお、このSB-02でもSB-01と同様に、柱は全て抜き取られていた。

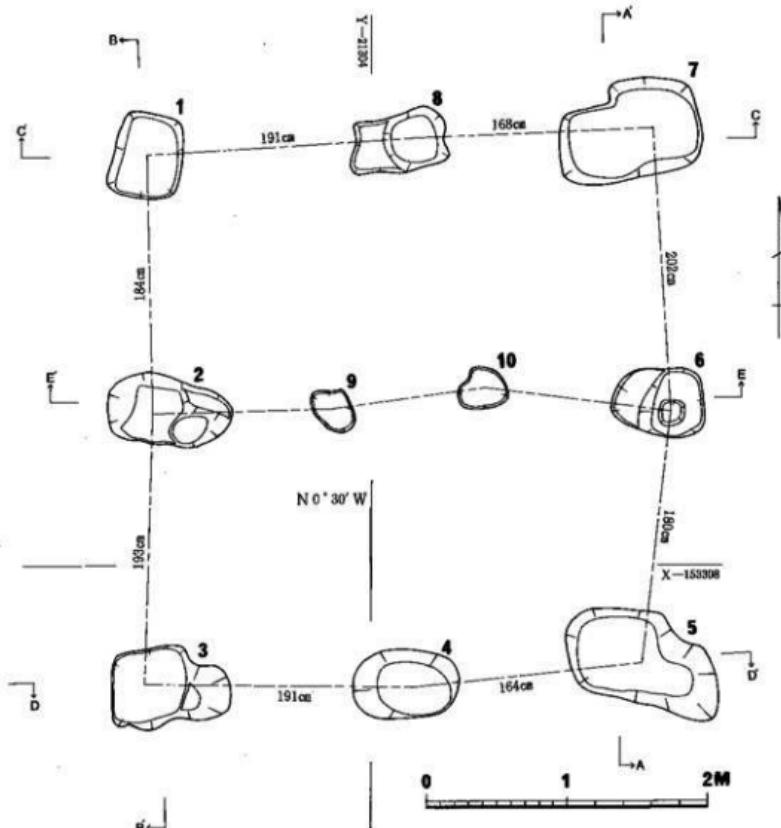


図9 SB-02 平面図 (S : 1 / 40)

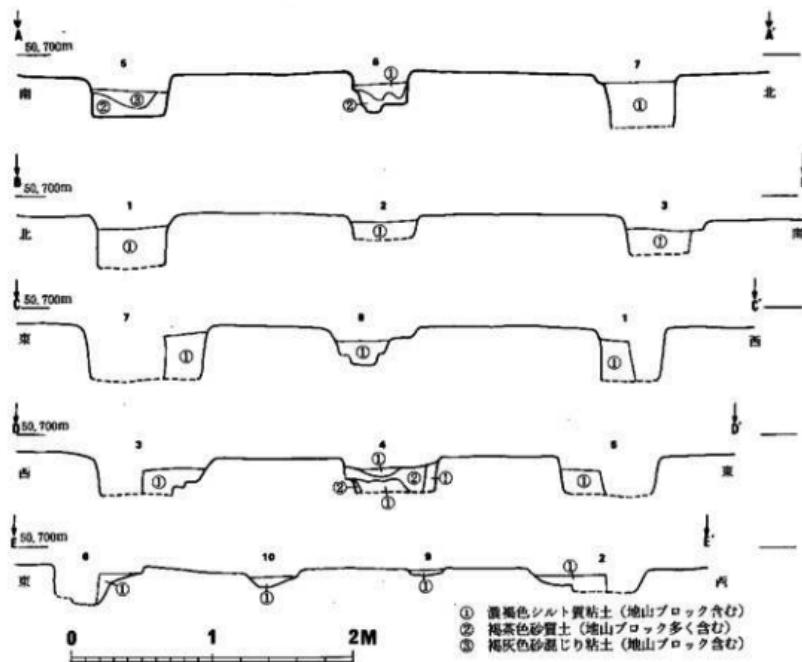


図10 SB-02柱列土層断面図 (S : 1/40)

SB-03 (図11、12、図版7-1)

南北約5.9m、東西約3.8mを測る2間×3間の南北棟の掘立柱建物である。南北柱列の各柱間距離は180~210cm、東西柱列に関しては188~190cmを測る。なお、建物の向きは西側柱列でN 2° Wである。

柱穴の深さは、未確認のものもあるが、確認できたもので検出面から30~40cmを測る。また、柱掘り方は1辺50~60cmのほぼ方形である。柱穴は検出できたもので直径約20cmを測る。

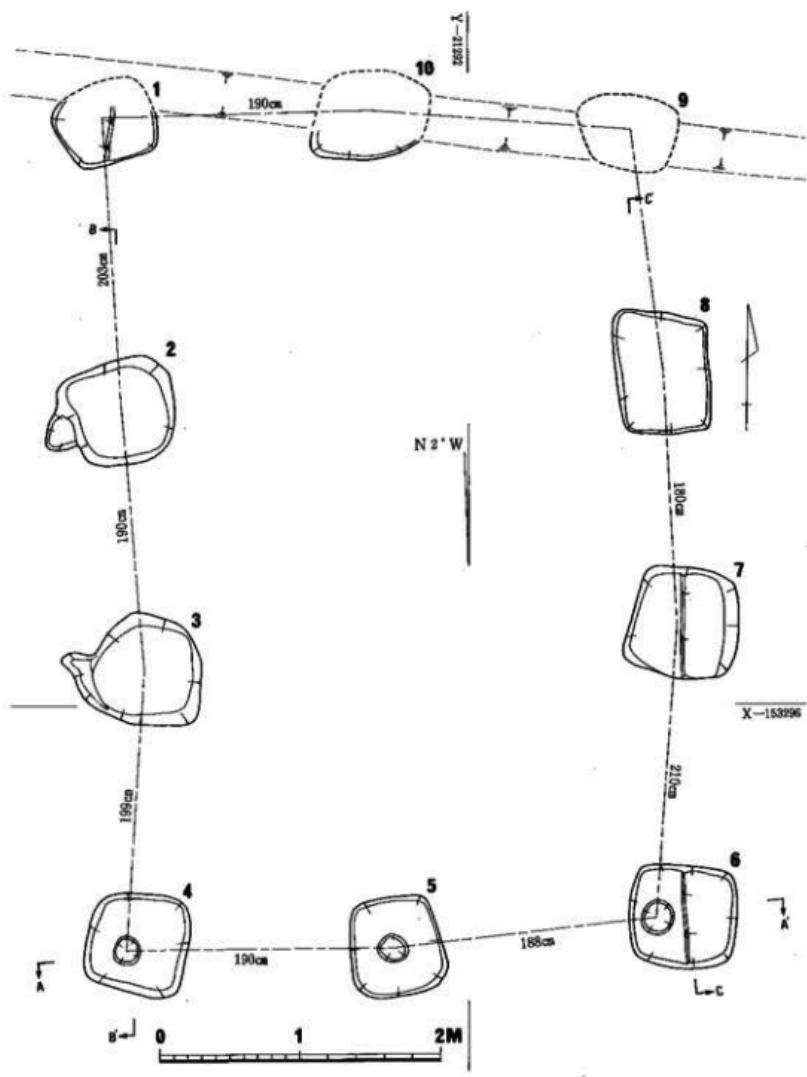
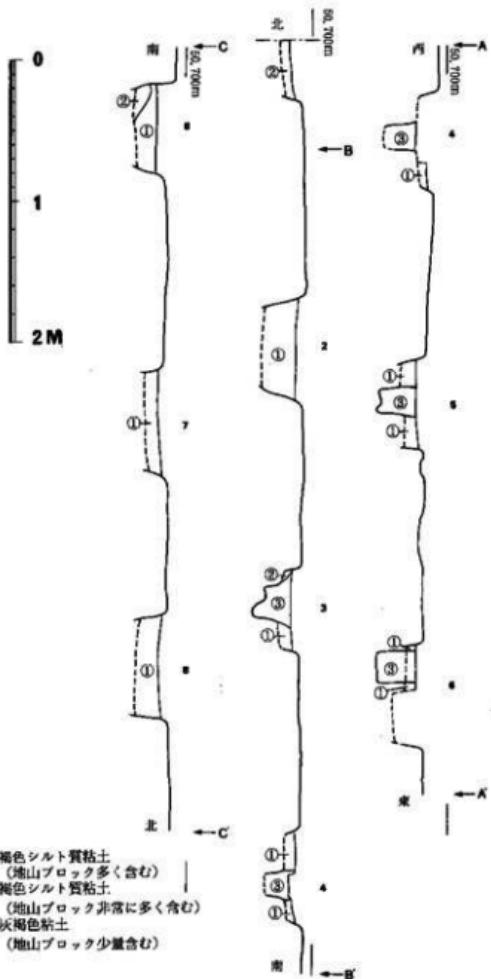


图11 SB-03平面图 (S : 1 / 40)



SB-04 (図13、14、図版8)

南北約5.7m、東西約4mの2間×3間の南北棟の掘立柱建物である。南北柱列の各柱間距離は175~203cm、東西柱列に関しては184~215cmを測る。建物の向きはN 4° 55' Wである。

柱穴の深さは40cm程度のものが多い。なお、柱は全て抜き取られた後、ていねいに埋め戻されていた(図14の①層)。

- ① 灰褐色シルト質粘土
(地山ブロック多く含む)
- ② 黄褐色シルト質粘土
(地山ブロック非常に多く含む)
- ③ 濃灰褐色粘土
(地山ブロック少量含む)

図12 SB-03柱列土層断面図 (S : 1/40)

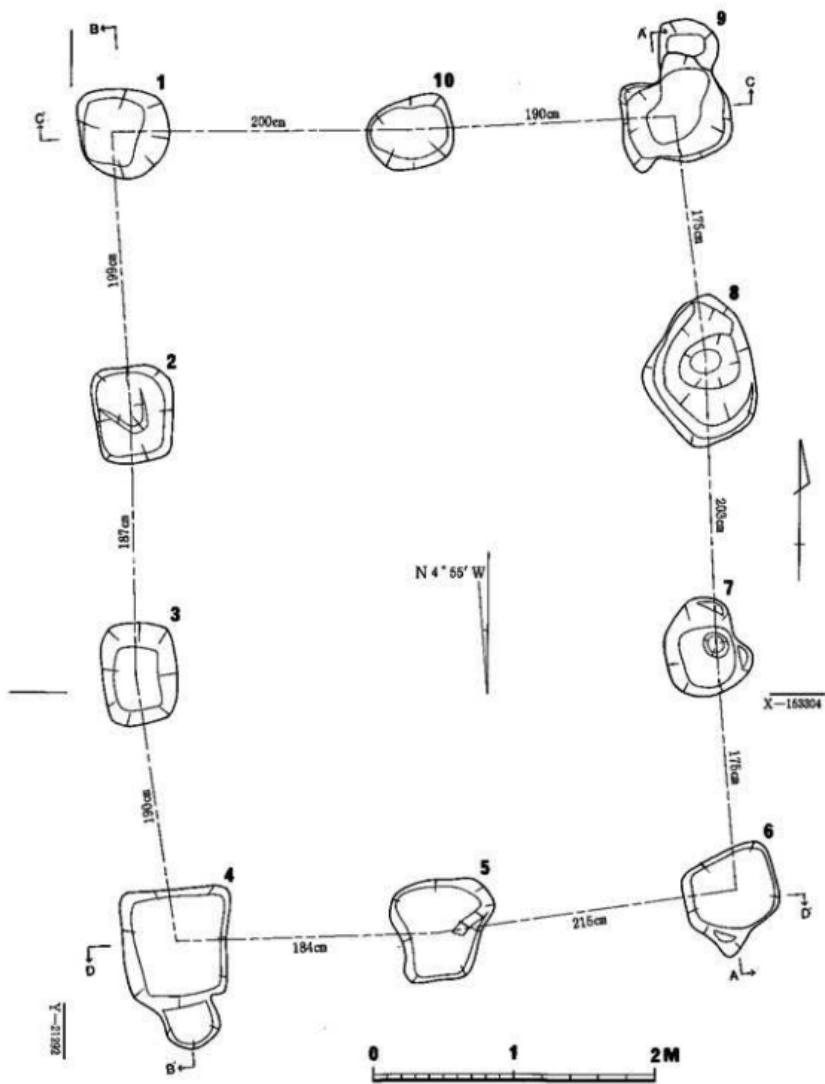


图13 SB-04平面图 (S : 1 / 40)

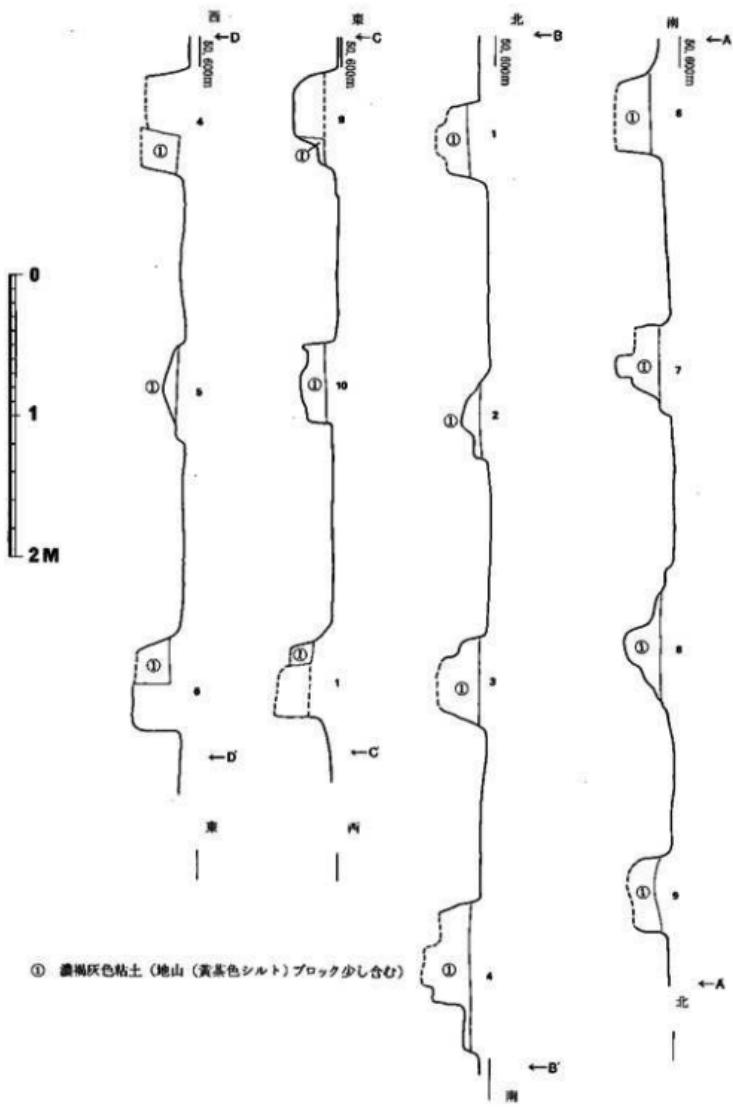


図14 SB-04柱列土層断面図 (S : 1/40)

SB-05 (図15、16、図版9)

南北約9m以上、東西約4.2mの2間×5間以上の南北に細長い掘立柱建物である。なお、図15、16で示したのは第2次調査での検出部分である。全体については図6に示した。

南北の各柱間距離は160~195cm、東西の各柱に関しては207~216cmを測る。なお、建物の向きはN10°Wである。

各柱穴の深さは検出面より20~30cm程度である。また、掘り方の規模は直径約50cmの不整円形であり、建物の平面プランの規模よりするとやや小規模である。

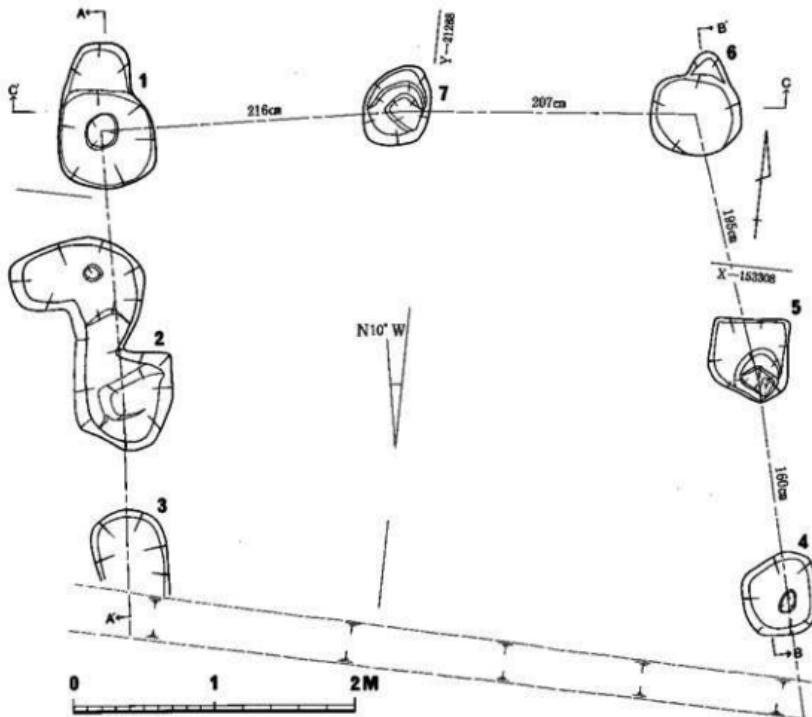


図15 SB-05平面図 (S : 1/40 第2次調査検出部分のみ図示)

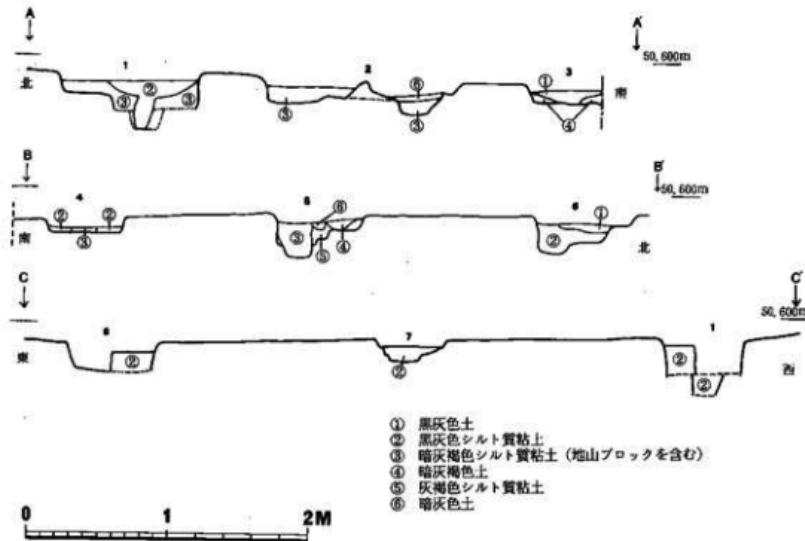


図16 SB-05柱列土層断面図 (S : 1/40)

SB-06 (図17、18、図版10)

南北約3.3m、東西約3.2mのほぼ正方形のプランをもつ総柱構造の掘立柱建物である。ただし、床持ちの柱は1本であり、他の総柱建物 (SB-01、02) とは構造が異なる。また、建物の向きも N $21^{\circ} 30' W$ を測り、北に対する方位的な振れが大きい。南北柱列の各柱間距離は159~163cm、東西柱列に関しては147~173cmを測る。

また、このSB-06に関しては柱穴の深さも50cm前後のものが多く、他の建物に比して深い。なお、柱は全て抜き取られてきたが、柱穴より考えて直径20cm程度のものであろうと思われる。

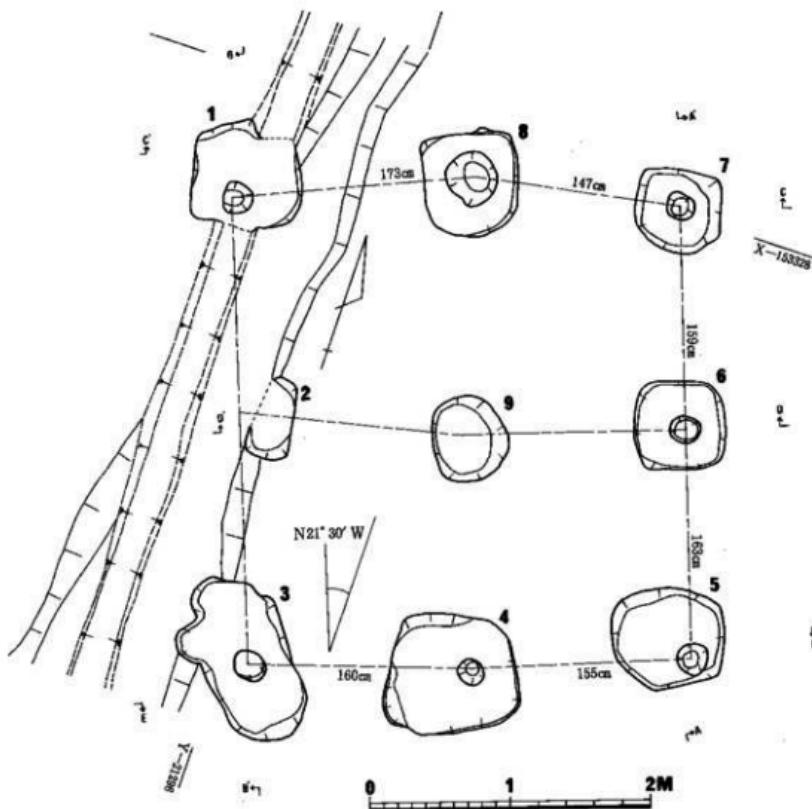


図17 SB-06平面図 (S : 1 / 40)

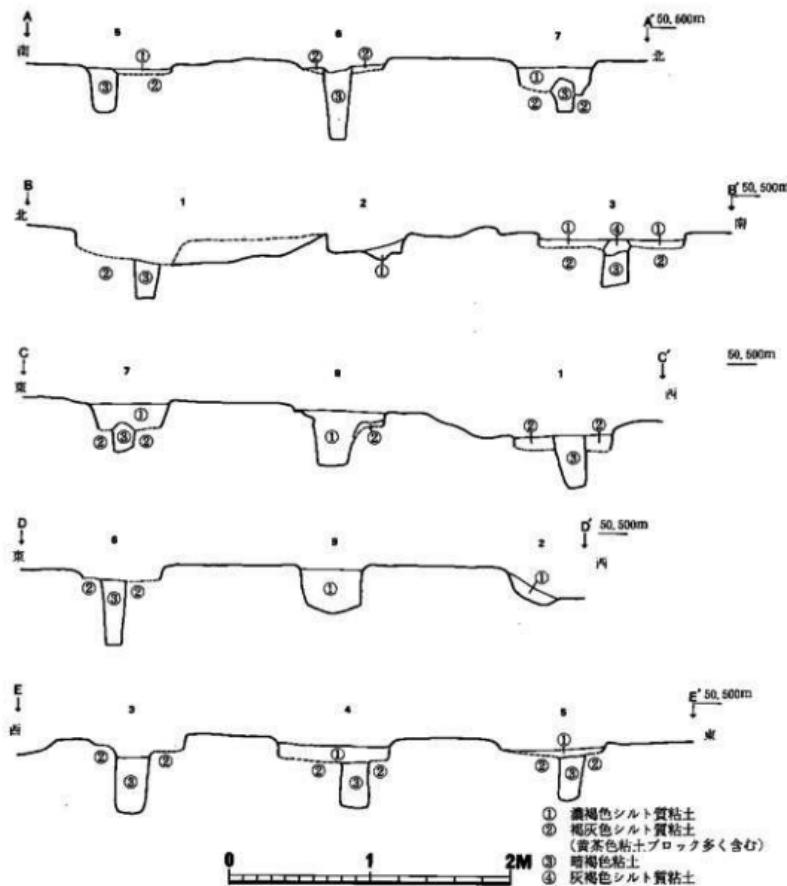


図18 SB-06柱列土層断面図 (S : 1/40)

SB-07 (図19、20. 図版11-1)

南北約2.9m、東西約3.2mの2間×2間の掘立柱建物である。南北の各柱間距離は141~149cm、東西柱列に関しては146~174cmを測る。なお、建物の向きはN12° 40' Wである。

各柱穴（掘り方）の深さはおおむね20~30cm、また掘り方の規模は30~40cm程度である。

なお、このSB-07は今回検出された掘立柱建物のうちでは規模が小さく、やや特異な存在である。

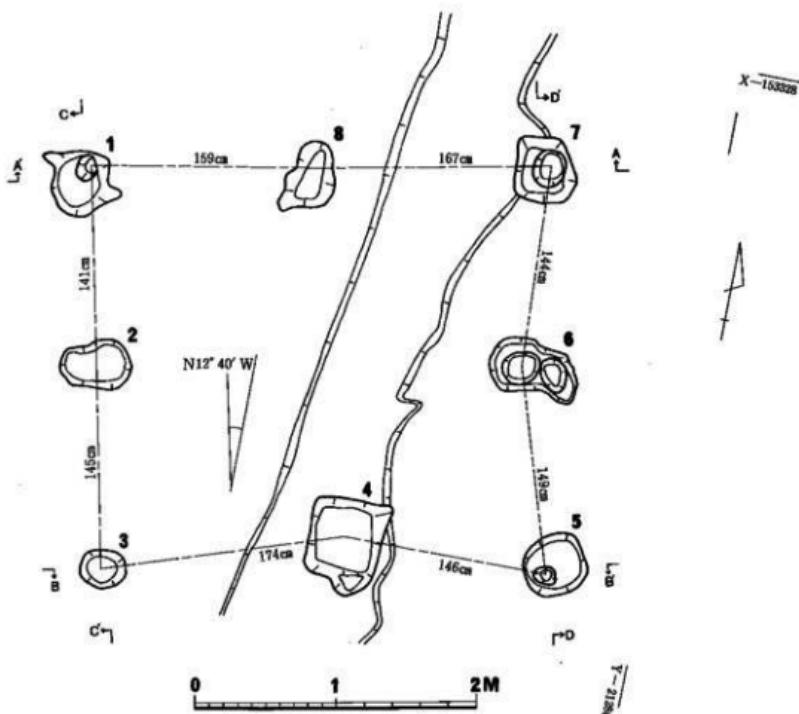
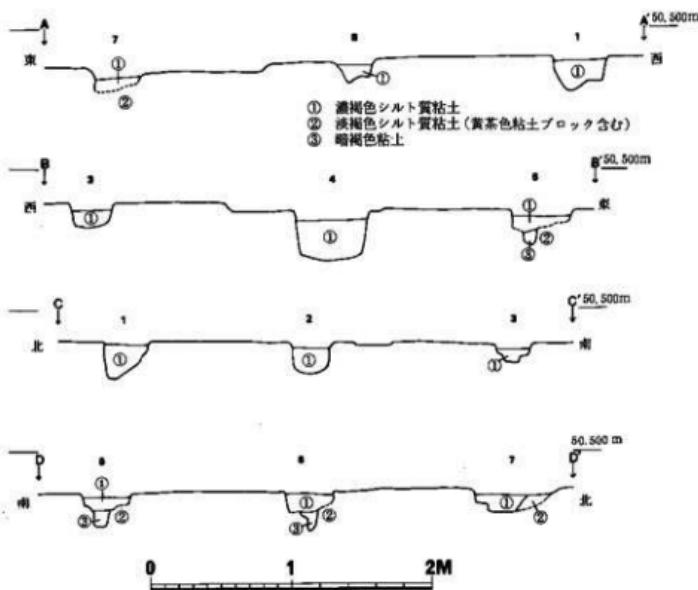


図19 SB-07平面図 (S : 1/40)



SB-08 (図21、図版12-2)

東西約2m、南北の規模は北半部未検出のために不明の掘立柱建物である。おそらく、SB-01や02と同様、床持ち柱を2本もつ総柱構造の建物となる可能性が強い。南北柱間は計測可能なもので165cm、東西は195cmをそれぞれ測る。なお、建物の方向はN 2° Wである。

SB-09、10 (図22、図版12-1)

两者ともに詳細な構造等は不明である。SB-09に関しては南北約3.2m、東西約5.2mの比較的大型の東西に主軸をもつ総柱構造をもつ掘立柱建物である。

また、SB-10は09と重複する建物であるが、詳細なプラン等は不明である。なお、両者の先後関係も不明。建物の方向は両者ともにN14° Wである。

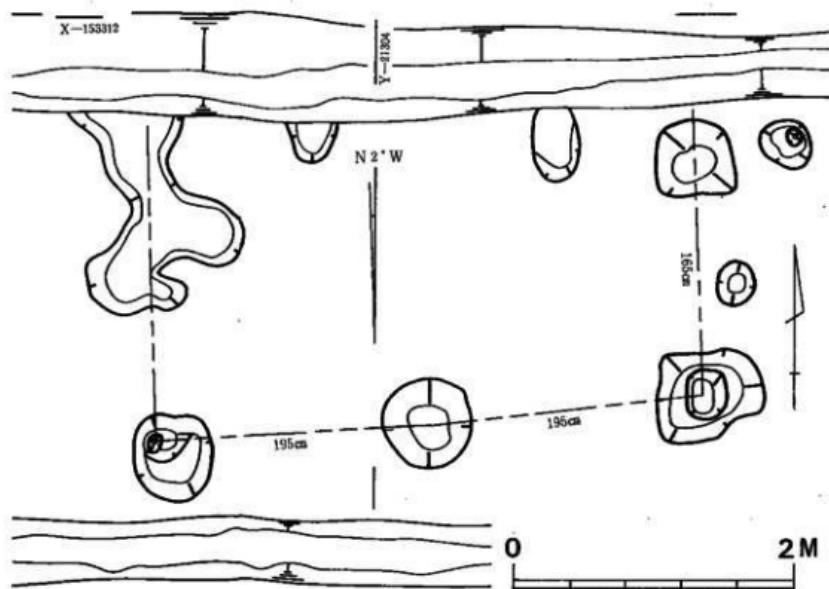


図21 SB-08平面図 (S : 1 / 40)

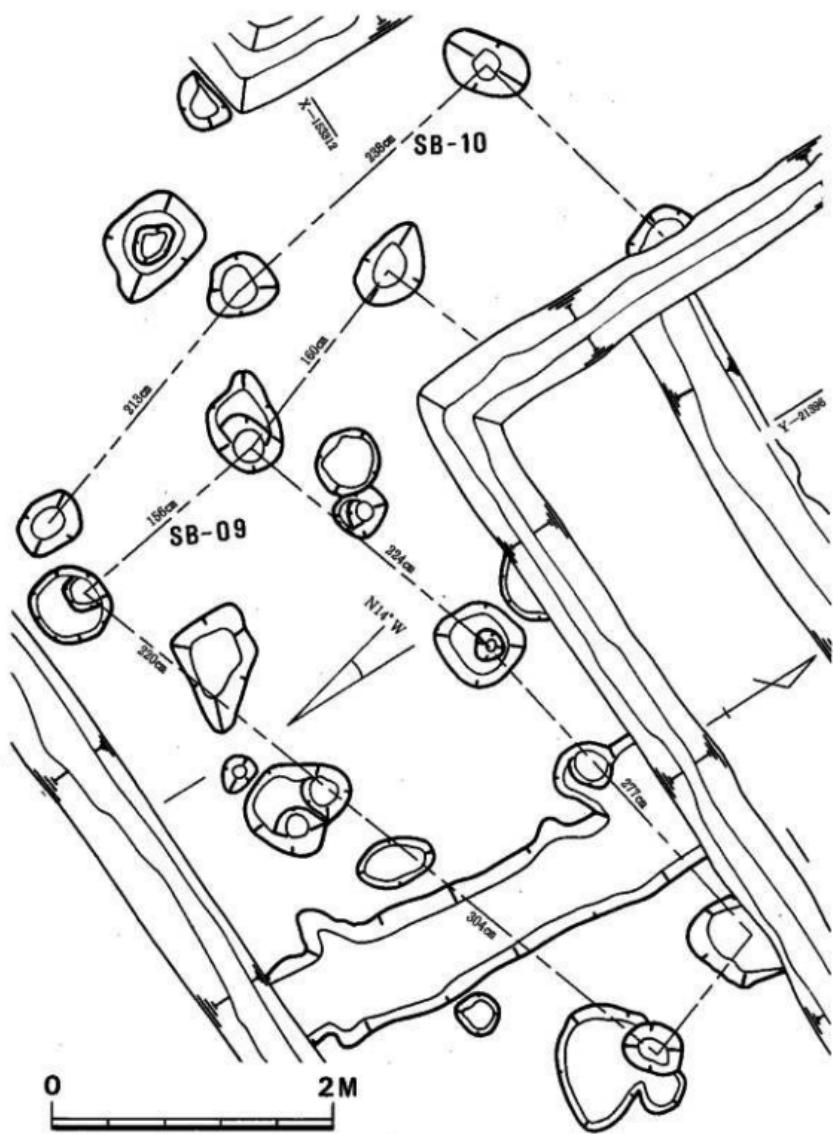


图22 SB-09、10平面图 (S : 1 / 40)

SK-01 (図23. 図版11-2)

直径約1.5mの不整円形の土坑である。深さは検出面より約45cmを測る。なお、断面図を作成した部分以外の部位では、点線に示したように土坑側壁のオーバーハングがみられ、全体として巾着状の断面形状を呈する。

土坑内堆積土は①濃褐色シルト質粘土、②濃褐色粘土層の2層であり、とくに後者には地山ブロックおよび炭化物が多くみられた。また、②層中よりは桃の種核も出土している。²³⁾

以上の点より、このSK-01はある種の祭祀的行為に用いられたものと評価しうる遺構である。同種の代表的な遺構としては、権原市院上遺跡、大和郡山市長塚遺跡のものがある。

出土遺物としては、前記した桃の種核のほか、土器小片が若干數出土している。いずれも7世紀中葉のものと思われるが、小片のため図化することはできない資料である。

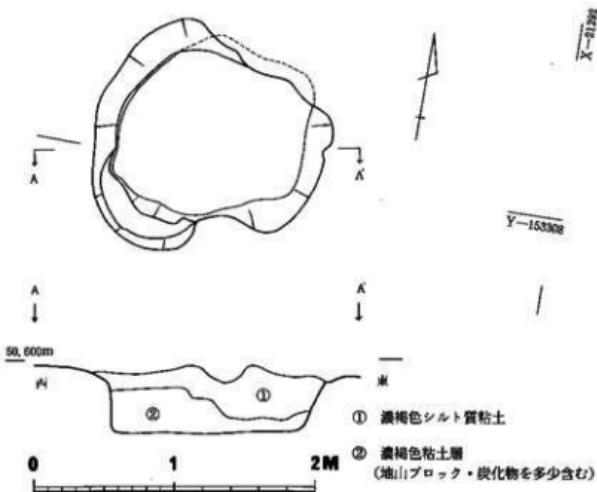


図23 SK-01平面図および土層断面図 (S: 1/40)

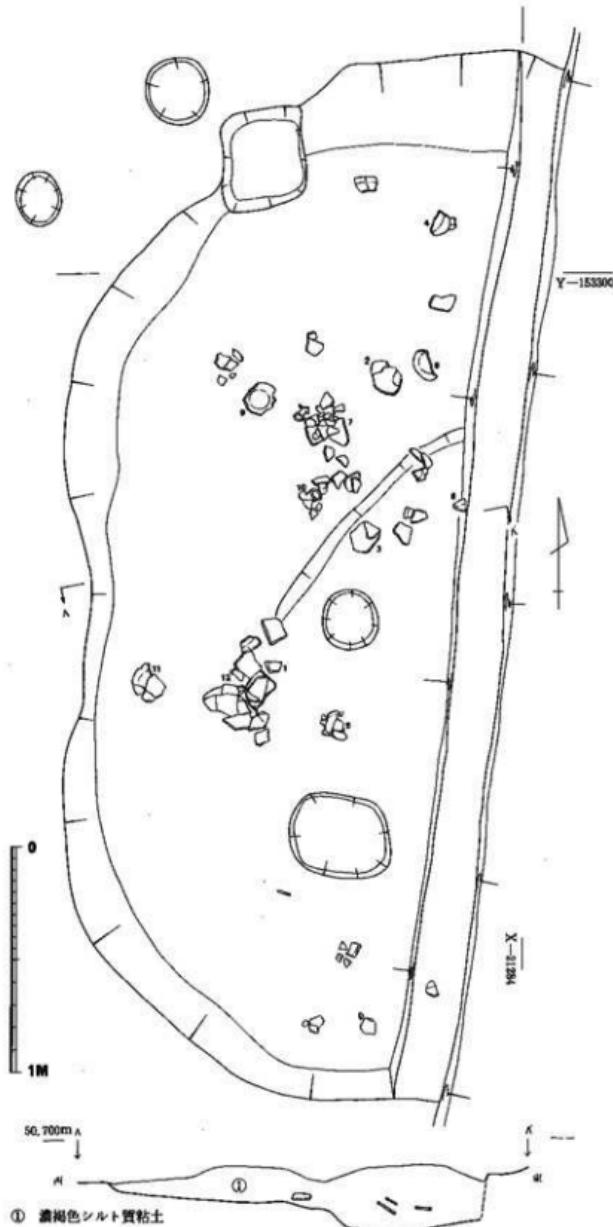


図24 SX-01平面図および土層断面図 (S : 1 / 40 図中の番号は遺物実測図に対応する)

SX-01 (図24. 図版13)

遺構の東半が調査区外のため、全体の形状、および規模等は不明である。検出部位のみで判断すると、全体として不整円形の浅い落ち込み状の遺構になると思われる。検出部の南北長約4.7m、東西長約2.0mである。断面形状は周辺部で浅く、中心部でゆるい段をもって深くなるものである。検出部位での最も深いところで約30cmを測る。土層は濃褐色のシルト質粘土一層のみで、分層はできなかった。埋め戻しは人為によって、一時的に行われたものと推定される。

なお、このSX-01よりは比較的多量の遺物が出土しており、今回の報告で図化可能な土器の大半はこの遺構より出土した。土器の形式はほぼTK-217型式の範疇に収まるものである。したがって、この遺構の時期は7世紀中葉と考えられる。また、土層の堆積は先記の通り人為によって一時的に為されたものと考えられるため、このSX-01出土の土器は一括性がきわめて高い資料と評価できる。

遺構の性格については、現時点では不明である。ここでは広義の意味における廃棄用の土坑として考えておきたい。

SX-02 (図25. 図版14)

遺構の北半部は調査区外のため、未検出である。検出部位は、南北長6.1m、東西長2.5m深さ約20cmの南北に長い不整形の浅い落ち込み状の遺構である。遺構内の堆積は①濃褐色粘質土一層にほぼ限られる。このSX-02も前述のSX-01と同様、その埋め戻しは人為によって、一時的になされたものと解釈できよう。出土遺物については、SX-01と比することごく少なく、図化可能なものは図29に示した2点に限られる、所属時期はやはり7世紀中葉であろう。また、遺構の性格については、不明である。

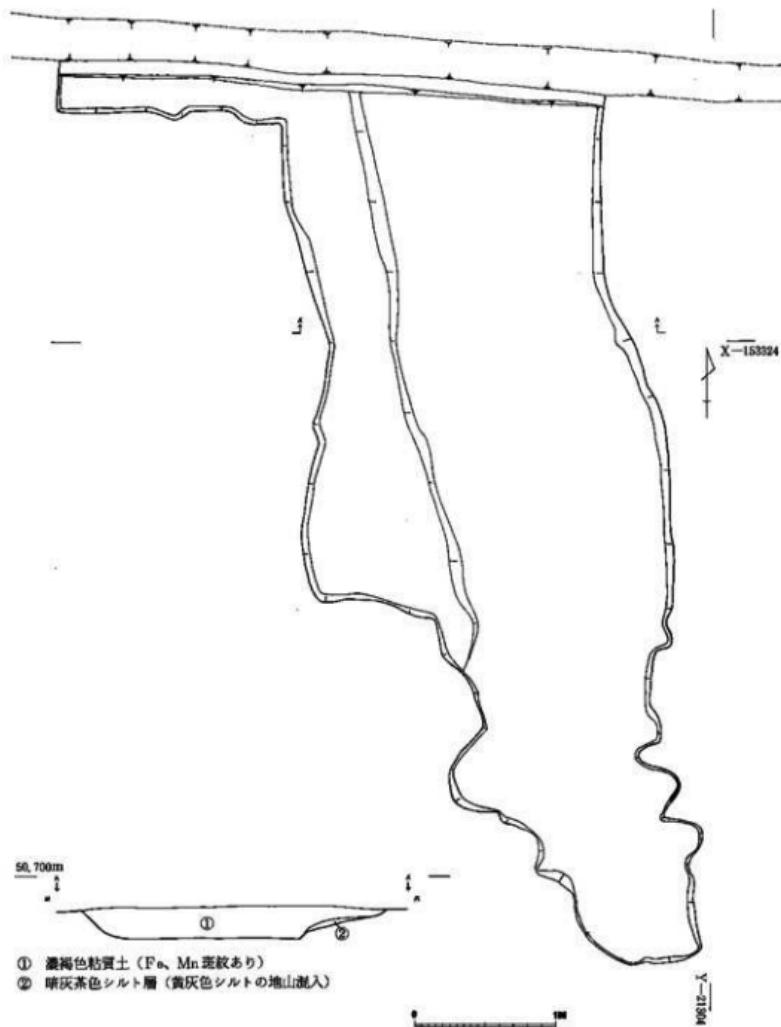


図25 SX-02平面図および土層断面図 (S : 1/40)

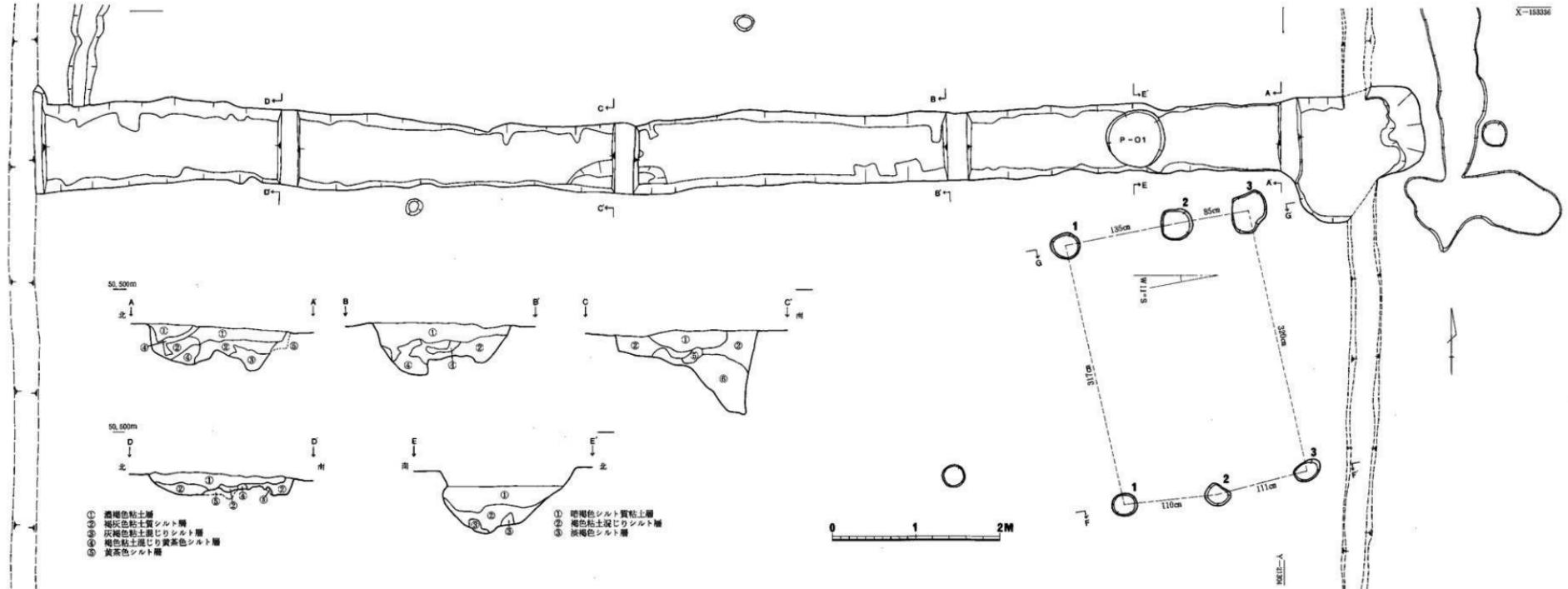


図26 SD-01、柱列-01、02平面図およびSD-01土層断面図 (S : 1 / 40)

SD-01 (図26、図版15-1)

遺構の西半部は調査区外のため、全体の規模は不明であるが、検出部位の東西長約8.3mの、ほぼ東西方向 (E40° N) の溝である。深さは検出面より30~40cm程度で、断面形状はU字形を呈する。ただし床面は凸凹が激しい。なお、堆積土より考えて、埋め戻しは短期間に、人為によって行われたことがわかる。また、溝内には2つの小土坑が認められる。出土遺物は全て小片に限られ、図化可能なものは含まれていなかった。時期は、7世紀中葉に比定される。

このSD-01は、溝として機能した遺構というより、何らかの構造物をとり壊した痕跡のようにも見受けられる。いずれにせよ、このSD-01以南には主要な建物が全くみられないことから、本遺構が七世紀代における高月遺跡の建物群の南限を画しているものと考えられる。また、後述の柱列-01、および02は、このSD-01と何らかの関係を有する遺構であろう。

柱列-01、02 (図26、27)

柱列-01の東西長約2.3m、02は約2.2mを測る。いずれも柱穴（掘り方）3より成る柱列である。SD-01に南接して存在することから、それと何らかの関連を有する遺構かと思われるが、方向は柱列-01がE10° 15' N、02がE 9° 30' Nで、SD-01のE40° Nとやや異なる。柱穴自体の規模は30cm程度であり、小規模なものである。

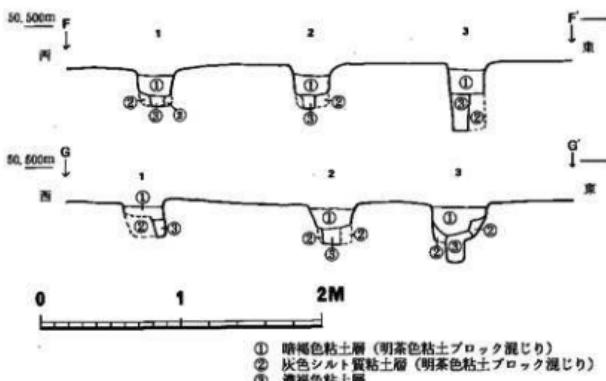


図27 柱列-01、02土層断面図 (S: 1/40)

耕作関係の遺構（図6参照）

SD-03（図28、図版15-2）

北東～南西方向に向けて直線的に延びる溝である。検出された部位のみで長さ約32.8mに及ぶ。幅は30～50cm。人為的に埋め戻されている。方向はE34° 15' Nであり、この方向は調査区の西方にある旧河道状の地形（図2参照）の方向にはば一致する。出土遺物は瓦器および土師器の小片に限られ、詳細な時期を捉えることはできないが、おおむね13世紀代と考えられる。このことはまた、旧河道も13世紀頃までは存続していたことを示す傍証となり得るであろう。遺構の性格としては、耕作にかかわる用水路と思われるが、今回の調査における同種の遺構としてはこのSD-03が最も古いものである。

素掘り溝

III-2項で触れたように、今回の遺構検出面の上位には②層（灰色粘質土=近世耕土）、および③層（暗灰色粘土=中世耕土）の2層が存在する。ここに記するものはそのうちの②層より掘りこまれたものである。方向はおおむねN 8° Eを測り、現行の畦畔の方向N 7° 10' Eに近似した値となる。時期は、出土遺物が微細なため明確にはできないが、およそ16～17世紀頃のものと考えられる。すなわち、該地周辺における地割りは近世初頭にはばその原形を整えたものと理解されよう。

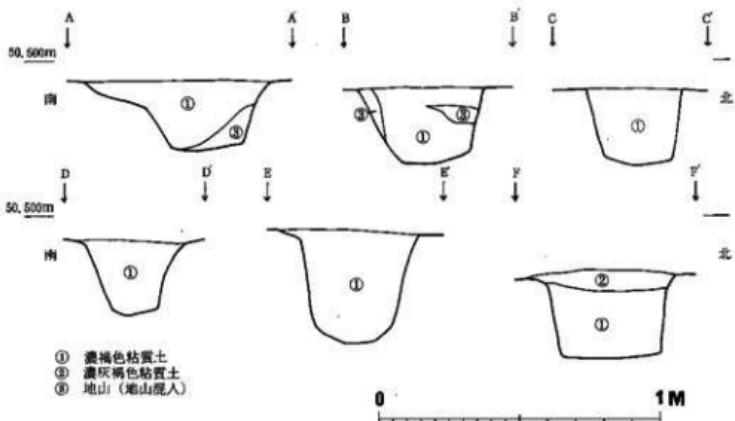


図28 SD-03土層断面図 (S: 1/20)

4. 遺物

SX-01出土遺物（図29、図版16-1~12）

高月遺跡では、全体として遺物の出土数が少なく、図化可能な資料は土器14個体、石器4個体にとどまる。なかでも図化可能な土器は大半がSX-01より出土した。

1は、須恵器杯蓋である。天井部は欠失。口縁部内面端部にかえりが付く。
2~6は須恵器杯身で、高台が付かないものである。体部は、4のみが直線的に立ち上がるほかは、すべて内彎する断面をもつ。

8、9は須恵器杯身で、高台が付くものである。体部は外側に強く屈曲した後、直線的に立ち上がる。高台は屈曲部が張り出したもので、端部は比較的するほどく収めている。

7は、須恵器鉢である。外側におおきく彎曲する体部をもち、曲部外面に棒状工具による押捺沈線を一条有する。

以上の須恵器は、いずれもTK-217型式に属する資料である。

10は、土師器高杯である。短い脚部にサカツキ状の外彎する体部をもつ小型の杯部が付く。脚部上半にはヘラによる面取りがみられるほか、内、外面ともに黒斑を有する。

11は、土師器杯である。ゆるく外彎する体部をもつ。内面には放射状の暗紋をもつが、表面剥落のためあまり判然としない状態である。

12は、土師器鉢である。上半で強く外側に屈曲する体部をもち、口縁部内面には一条の沈線を有する。内面にはラセン状、および放射状の暗紋（2段）をもつほか、胎土が非常に精良なものを用いているため、全体として精緻な印象をもつ土器である。

以上の出土遺物は、いずれも7世紀中葉のものと考えられる。また、III-3項（SX-01）で触れたように、これらの遺物は一括性の高い資料である。

SX-02出土遺物（図29、図版16-13、14）

13は、須恵器杯蓋の天井部である。宝珠形のつまみを有する。

14は、須恵器杯身の、高台をもたないものである。SX-01出土須恵器杯身の2、3、5、6と同形態のものである。13、14ともにTK-217型式に属する資料である。

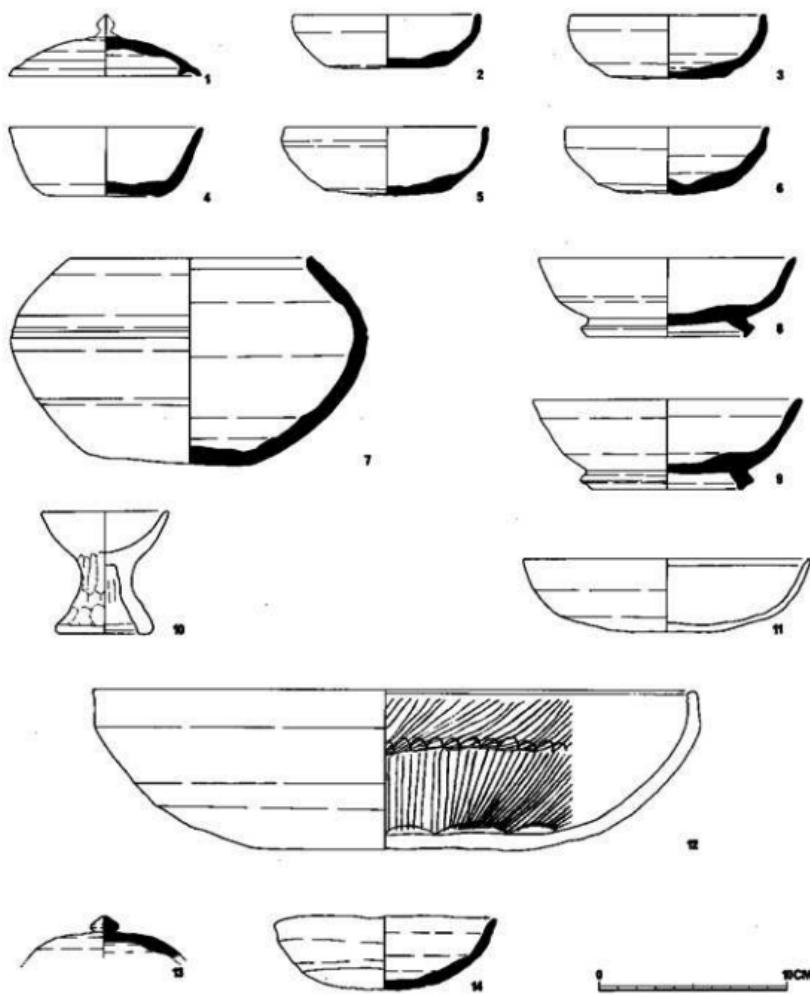


图29 出土遗物实测图 (1~12=SX-01 13, 14=SX-02 S: 1/3)

表2 土器類解説

番号	器種	測定値(cm)	断面	縦	横	地	土	色	調	燒	灰	残存率(%)	備考
1	須恵器杯盤	口:10.2 高:1.9 (底)	(c) 口:ロクロケズリ (d) ロコロナデ	長石、チャートの 漂白含む	明灰色							2.0	
2	須恵器杯身	口:10.0 底:8.4 高:2.6	(c) 底:ロクロケズリ (d) ロコロナデ	長石、長石 漂白含む、西	(e) 灰褐色 (f) 灰白色							4.0	(o) 自然焼付着
3	須恵器杯身	口:10.4 (底) 高:6.0 (底) 高:3.4	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ	長石、長石含む 漂白含む	明灰色							3.0	
4	須恵器杯身	口:10.2 (底) 高:6.9 (底) 高:3.6	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ	長石、チャート含む	無色							4.0	
5	須恵器杯身	口:11.0 高:7.0 高:3.6	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ	長石、チャート含む	明灰色							6.0	
6	須恵器杯身	口:10.9 高:3.6	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ	長石、長石含む 漂白含む	明灰色							9.0	
7	須恵器盤	口:13.0 大:19.0 高:8.0 底:11.0	(c) 体上半:ロクロナデ 下半:ロクロケズリ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	石英、長石、漂白含む	灰白色							7.0	
8	須恵器杯身	口:13.8 底:8.6 高:4.6	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	石英、長石の粗粒 漂白含む	明灰色							7.0	
9	須恵器杯身	口:14.4 (底) 高:6.0 高:4.6	(c) 口:ロクロナデ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	チャート、石英 漂白含む	明灰色							6.0	
10	土師器高杯	口:6.8 (底) 高:6.3 高:6.5	(c) 体部:ナデ 底:ロクロケズリ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	赤色土灰、石英 漂白含む	赤茶色							8.0	
11	土師器杯	口:15.4 (底) 高:3.9	(c) 口:ロコロナデ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	漂白、長石、 漂白含む	暗茶色							4.0	(o) i 共晶斑析物30% (j) 放射状斑紋
12	土 壁	口:31.4 底:14.5 高:6.4	(c) 口:ロクロケズリ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	赤色土灰、漂白 長石、漂白含む	赤茶色							7.0	(k) 馬鹿背(20%) (l) 放射状斑紋
13	須恵器杯盤	—	(c) 天:ロクロケズリ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	長石、漂白含む	青灰色							1.5	
14	須恵器杯身	口:12.0 底:4.0 高:4.0	(c) 口:ロクロケズリ (d) ロコロナデ (e) ロコロナデ	長石、漂白含む やや粗	無色							8.0	

須蓋中の器体について
口 = 口径、大 = 脈大径、底 = 底径 (厘米)、高 = 高さ (厘米)、(o) = 外面、(i) = 内面、体 = 体軸、天 = 天井軸、底 = 底軸、ロ = ロ棒部

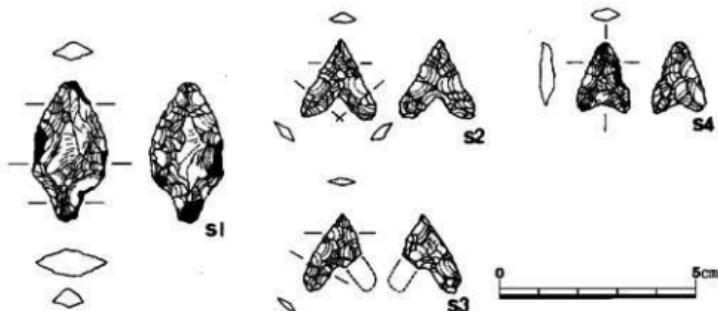


図30 高月遺跡出土石鎌実測図 (S : 7 / 10)

石器 (図30、図版17-S1~S4)

高月遺跡では、4点のサヌカイト製の打製石器（いずれも石鎌）が出土している。さらに、サヌカイトのフレイクが若干数出土した。ただし、いずれも後世の混入とみられるもので、それに伴う時期の造構は、今回検出されていない。

S1は、凸基有茎式の石鎌である。図示した裏面に大剣離面を有し、縁辺に細部調整を施している。厚みのある、大型の石鎌である。

S2およびS3は大きくえぐりこれまで基部をもつ、凹基無茎式の石鎌である。S2は直線的な側縁をもち、S3のそれはやや外彎する。

S4は、やや凹んだ基部をもつ、平基無茎式の石鎌である。調整は比較的粗い。

これらの石鎌の所属する時期は、いずれも弥生時代と思われる。

番号	形式	高 (mm)	幅 (mm)	最大厚 (mm)
S-1	凸基有茎式	35.7	18.9	6.2
S-2	凹基無茎式	20.1	18.9	2.2
S-3	凹基無茎式	20.0	15.0(残)	2.1
S-4	平基無茎式	17.8	13.9	3.1

表3 石器計測表

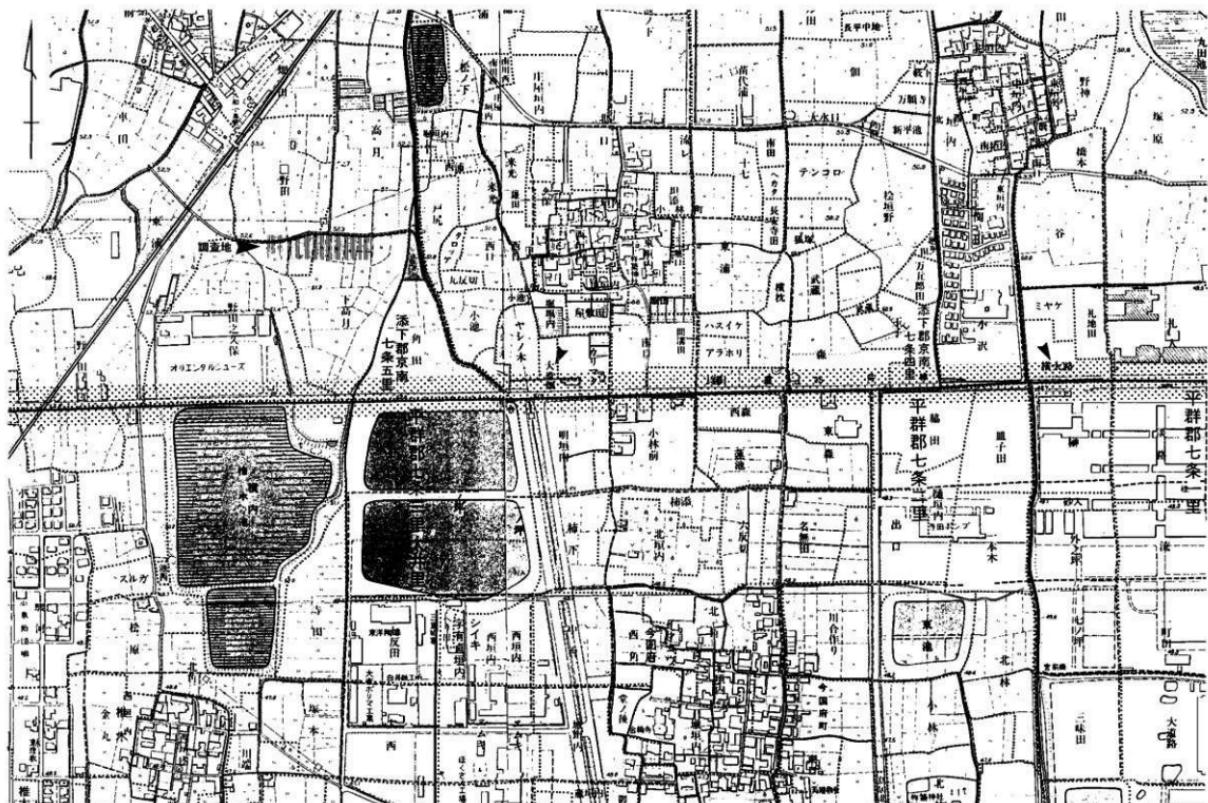


図81 調査地周辺の復元里程及び北の橋太路推定ライン（トーン部分）（「大和国急出復元図」より作成）

IV まとめ

今回の調査における最大の成果は、掘立柱建物群の検出にある。各建物の時期については、柱穴（掘り方）内出土資料、ならびにSX-01およびSX-02出土の資料より考えて、7世紀第2四半期にはほぼ収まるものと考えられる。すなわち、この建物群の存続期間は、きわめて短いものであったと推定される。

つぎに、各建物の方位についてであるが、それについては図32に示した通りである（この図では北に対する方位的なズレを実際の倍にして表示）。まず第1には、いずれの建物も北に対しやや西偏した方向性をもつ点が注意されるが、そのうちでも、振れがやや小さいグループ（SB-01～04）と、大きいグループ（SB-05～10）に大別できるようである。あるいはこの二者が時期的に遅いを示す可能性もあるが、ここではその新旧関係を指摘することはできない。

また、掘立柱建物10棟のうち5棟（SB-01、02、06、08、10）は縦柱構造をとり、倉庫としての用途が推定される。これはひとつの建物群のなかでの倉庫が占める割合としては比較的高いものであろう。

以上の諸要素（短期間の遺跡、方向性、倉庫の多さ）を勘案するならば、高月遺跡における掘立柱建物群は、一般的な集落、あるいは居館と考えることは難しいように思われる。それでは、この遺跡がどういう性格のものかという問い合わせでは、類例となる遺跡が少なくとも奈良県内では存在しないこと、また文献上にも管見では全くみあたらないことから、現時点ではそれに明確に答えることはできない。

ところで、II-2項で触れたように、高月遺跡の南方約200mには「北の横大路」推定ラインが通っている。図31は『大和国条里復元図』の複写であるが、それによれば調査地の南東に「大道筋（傍？）」や「横大路」の地名をみるとができる。ここで仮に「北の横大路」

図32 各建物の主軸方向（角度は実際の倍にして表示）

を下ツ道や横大路と並ぶ古代の官道として捉え、岸俊男の官道に関する概念、すなわち「外国使節の入京が契機となって、国家の威儀を示すためにも官道の整備が必要となり、古道がしだいに整えられていったもの」従うならば、その時期もまた7世紀を前後するものといわれ、高月遺跡の掘立柱建物群（7世紀）に関してある種の具体的解釈が可能なように思われる。

まず建物の方向性については、「北の横大路」の存在を前提とし、両者に何らかの関係を考えることによってある程度の説明が可能なようと思われる。また、建物の構成上、倉庫の占める割合が高いことについても、「北の横大路」との関連を考えるならば、ある程度の説明が可能であろう。つまり、想像をたくましくするならば、高月遺跡は「北の横大路」に接して営まれ、道を通じて運ばれる物資の一時的な保管地として経営された遺跡と考えられるのである。また、経営時期の短さについては、後に他所に、より整備された倉庫群が建設されたことに伴う移転、廃絶によるものと考えることによって解釈されるであろう。すなわち、高月遺跡は「北の横大路」が整備された当初においてのみ、経営された遺跡と考えてみたい。

以上、高月遺跡の性格について、見てきたようなことを書いてみたが、こうした憶測が正しいか、否かは、すべて同種の遺跡が、官道（下ツ道、横大路）沿いに発見されるか、否かである程度判断し得るであろう。したがって、こうした官道構造は、その周辺をも含めて周知の遺跡として認知するべきであると考える。また、既掘の遺跡のうち、同種の遺構が認められるものがないか等については、読者諸兄より多数のご教示を乞う次第である。

<注>

- ① 武久義彦「地形分類図」「土地分類基本調査 桜井」および同『奈良、大阪東南部』奈良県企画部開発調整課、1982
- ② 奈良県立橿原考古学研究所と大和郡山市教育委員会が1988年に調査。報告書未刊。
- ③ 林部均「古里敷遺跡発掘調査概要」「奈良県遺跡調査概報 1987年度」奈良県立橿原考古学研究所、1988
- ④ 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」「文化財学報 第3集」奈良大学文学部文化財学科、1985
- ⑤ 藤井利章「満願寺遺跡発掘調査概要」「奈良県遺跡調査概報 1982年度」奈良県立橿原考古学研究所、1983
- ⑥ 服部伊久男「西田中遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1988
- ⑦ 服部伊久男「菩提山遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1988
- ⑧ 山川均「地形的条件より見た遺跡の立地、及び分布状況の研究」「文化財学報 第7集」奈良大学文学部文化財学科、1989
- ⑨ 渡口芳郎ほか「原田遺跡発掘調査報告書」大和郡山市教育委員会、1991
- ⑩ 山川均「本庄・杉町遺跡発掘調査概要報告書」大和郡山市教育委員会、1989
- ⑪ 大和郡山市教育委員会が1987年に調査。報告書未刊。
- ⑫ 伊達宗泰「小泉狐塚・大塚古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第32冊、奈良県教育委員会、1968

- ⑩ 『奈良県の主要古墳Ⅰ』奈良県教育委員会、1971
- ⑪ 注⑫文献に同じ
- ⑫ 伊藤勇輔ほか「東狐塚古墳」「奈良県文化財調査報告書 第28集」奈良県立橿原考古学研究所、1976
- ⑬ 小島俊次「割塚古墳の調査」「青陵」No.14、奈良県立橿原考古学研究所、1968
- ⑭ 東 潤 「世尾古墳発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 1981年度」奈良県立橿原考古学研究所、1982
- ⑮ 注⑯文献に同じ
- ⑯ 寺沢薰ほか「本庄・杉町達跡発掘調査報告」「奈良県遺跡調査概報 1979年度」奈良県立橿原考古学研究所、1980
- ⑰ 岸俊男「大和の古道」「日本古文化論叢」奈良県立橿原考古学研究所、1970
- ⑱ 村田修三「筒井城」「日本城郭体系」第10巻、新人物往来社、1980
- ⑲ 村田修三「小泉城・陣屋」注⑳文献所収
- ⑳ 山川均「埋める祭祀考」「考古学論叢」第13集、奈良県立橿原考古学研究所、1988
- ㉑ 注㉒文献に同じ

図 版



遺跡全景（第1～3次 合成写真 上が北）



1. 第3次調査 調査区北東層序



2. 同上 調査区南西層序



1. 第2次調査全景（北東より）



2. 同上 (東より)



1. 第2次調査全景（南西より）



2. 同上（北西より）



1. 第2次調査区東半（北より、手前SB-03）



2. 同上（南より、手前SB-05）



1. SB-01 (北より、奥はSB-02)



2. SB-02 (北より)



1. SB-03 (南より)



2. SB-04 (北より)



1. SB-04 (北より)



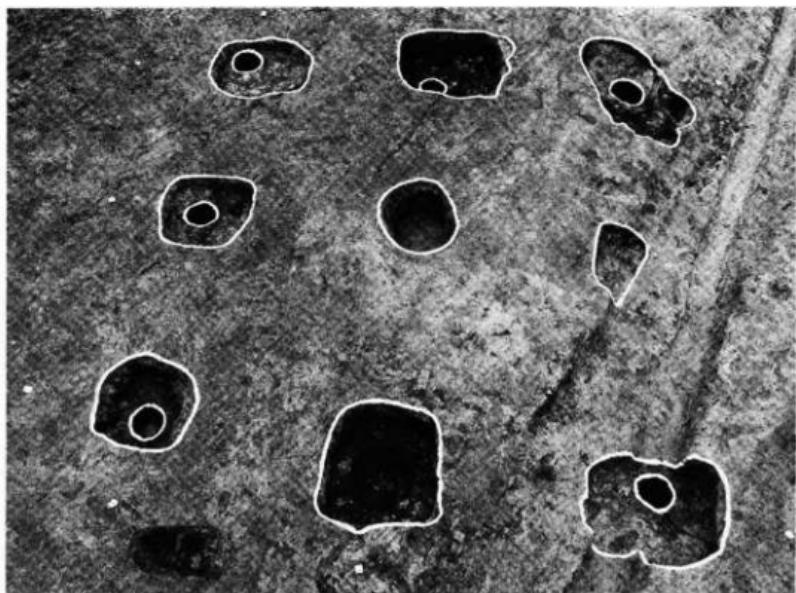
2. 同上 (南より)



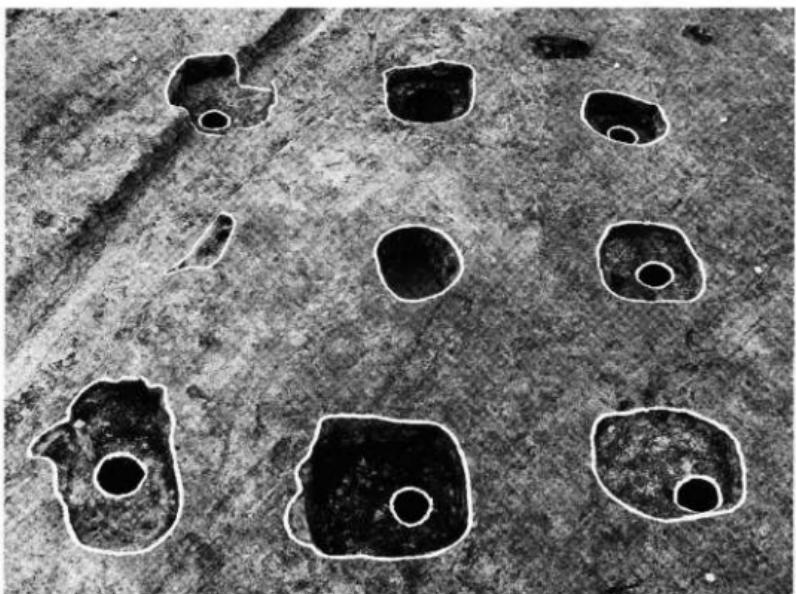
1. SB-05 (北より)



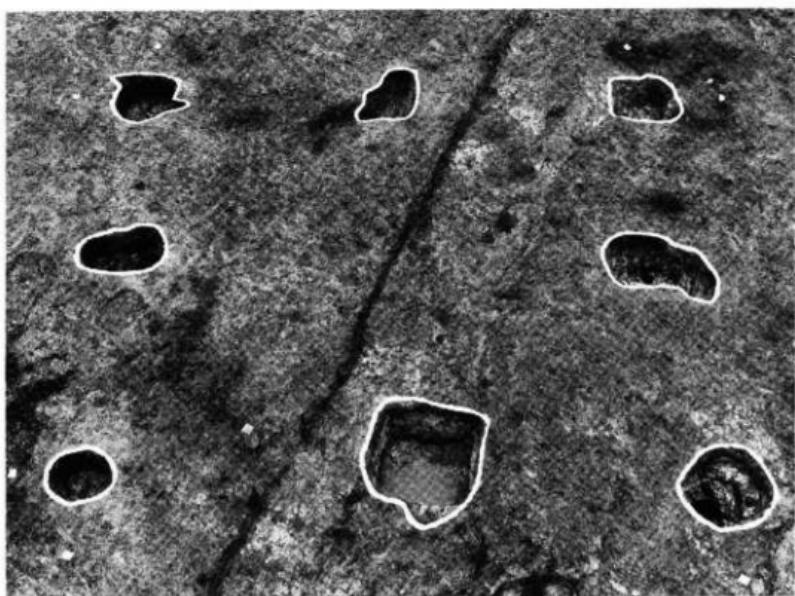
2. 同上 (南より)



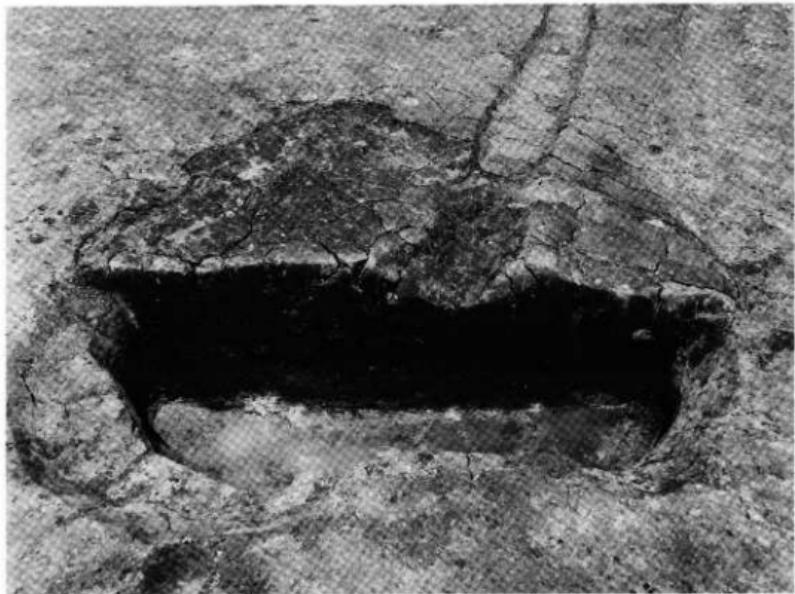
1. SB-06 (北より)



2. 同上 (南より)



1. SB-07 (南より)



2. SK-01半掘状況 (南より)



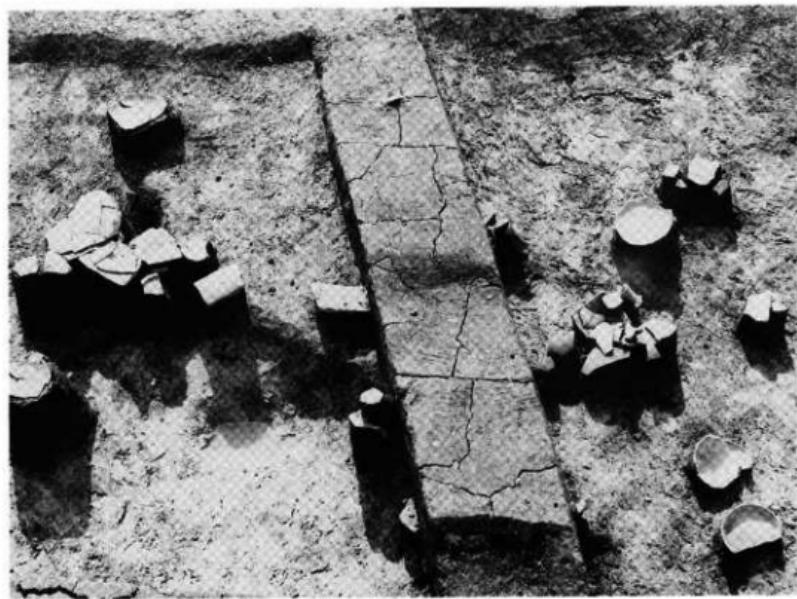
1. SB-09・10 (南より)



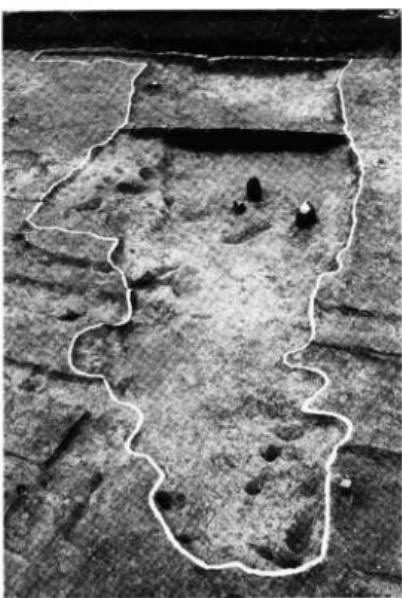
2. SB-08 (北より)



1. SX-01 遺物出土状況（西より）



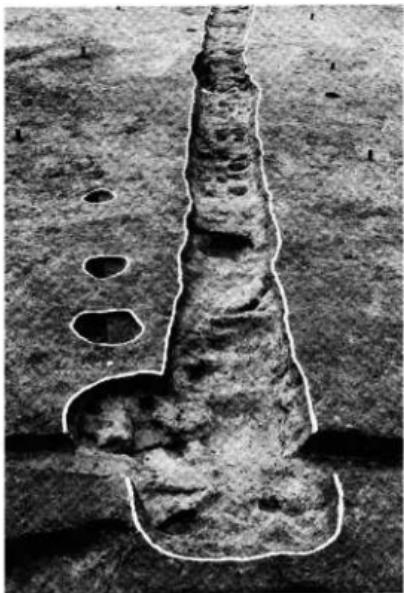
2. 同上部分（東より）



1. SX-02 (南より)



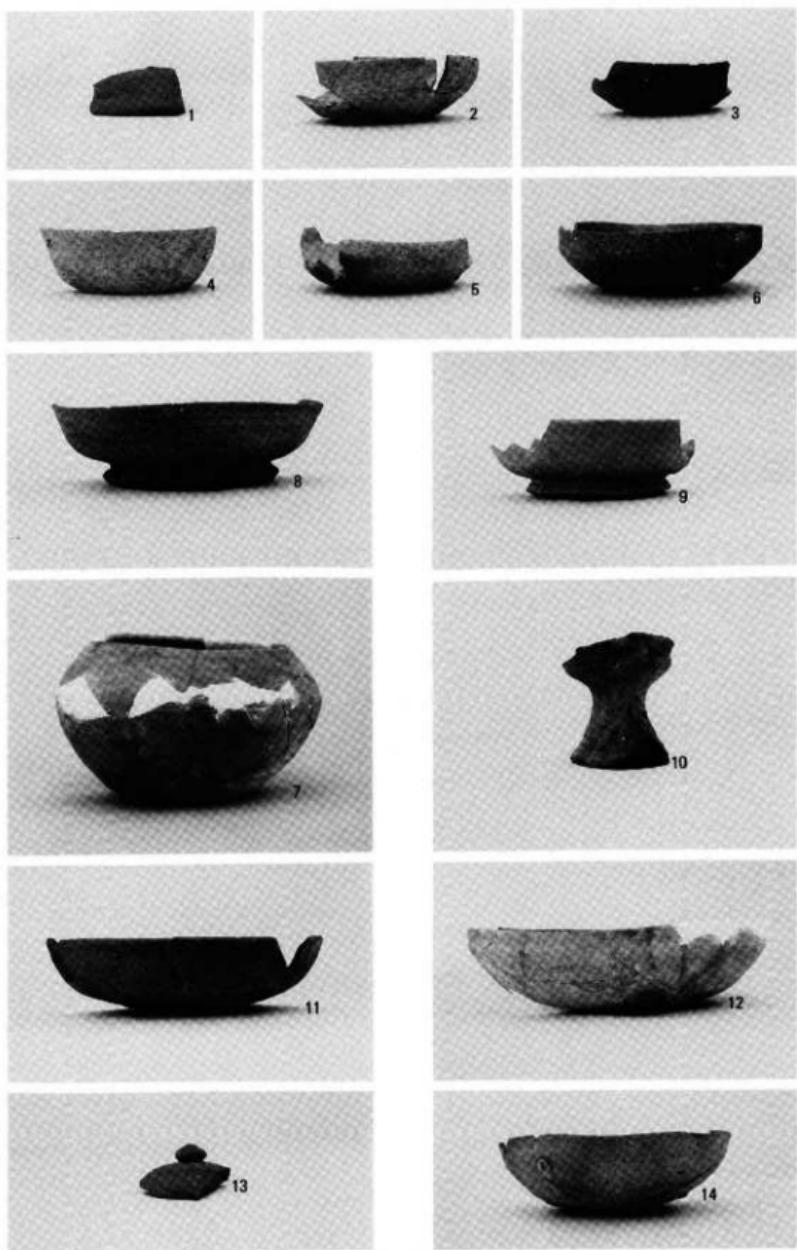
2. 同上 (北より)



1. SD-01 (東より)



2. SD-03 (北東より)



1 ~12 = SX-01、13・14 = SX-02 (S : 1/6, 12のみ 1/6)



(S : 1 / 1)

平成3年3月31日発行
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

高月遺跡
発掘調査報告書

編集 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4

発行 大和郡山市都市整備部
大和小泉駅前区画整理工事事務所
大和郡山市小林町170-2

印刷 明新印刷株式会社
奈良市橋本町36番地